

石垣の崩が草に埋れて居て、それには皆苦蒸し、一個々々美事な盆石然として居る。珊瑚岩の見本として、舜天の起つた古城の記念として、はた盆石として余はその小なるものを拾ひ來つた。

暫らくして城の東端かの巨人の如く突立つ巨巖の下へ出た。この邊にも細かな高麗芝が生て、割籠でも開くには嚙善さうに思はれる。而もこれが四月草が伸ると、格好な飯匙倩の巢窟になると聞ては、何となく氣味悪く感ぜざるを得ぬ。

この巨巖の下の洞になつたところを、石で壘みこめた墳墓があつて、鍵の手に壘を築き、内地風の古色蒼然たる石燈籠が建て居たが、石燈籠には判断の出來ぬ象形文字の如きものが數個幽かに認められる。兎

に角古いもので無論何人の墳墓とも不明のものであるが、ひどく余の好奇心を惹付られた。まさかには舜天の墓でもあるまい、且それにしては小さ過ぎるなど考へながら、こゝから北へ廻ると、見上げる懸崖の下には通り路さへ覺束なく、凄まじい珊瑚巖が古城を擁護して、壁の如く屏列して居る。これ等の巨巖の中には自然の石門をなしたのもある。

巖と巖と重なつて眞暗な洞穴を構へたのもある。いづれも神懸鬼斧の妙を極めて居るので、城の上から見下した時とは違つた、一種崇高の感而起さざるを得ない。これ等の巨巖に圍繞され、斷崖より成つて居る浦添城は當時にあつては實に金城鐵壁であつたらう。慥かに首里の死命を制すべき地位にあつたものと想像され、従つて舜天がこゝから

起つたのも決して偶然では無つたらうと思はれる。

(五) ようとれの古墳

巖の根に名も知らぬ薄紅の鐘状花や、やはた草などが無心に咲誇つて居る間を辿つて、少し下ると松林になる。松林の下芝坐には琉球人の珍羞とする山海苔が出来て居る。この松原を西の方に通り抜け再び城に面して上つて行くと、ようとれといふ場處へ出る事が出来る。城壁をなして居る巖窟の下、一方を石疊で築き上げ、宛ら隧道のやうに開いて居る石門がある。漸瀝として水の滴る下を潜り抜け、左に折れると更に第二の石門を現出する。石門は削るが如き城壁の半腹か

ら一丈二尺ほどの厚さに疊み卸して来た石垣の中に設けられたので、門のある邊の高さは一丈餘、中へ入ると長方形をなした百坪餘りの地所が三面この莊重な石垣を以て取繞らされ、一面珊瑚石灰岩より成る城壁の下には、二個の大なる石室即ち墳墓が設けられてゐる。これもやはり巖窟を利用したものであらう。いづれも漆灰で塗籠め、大なる入口を設けてゐる。その一方のものには左右に高さ一丈厚三四尺の方柱(石で疊み上げ漆灰で塗固めたもの)が立ち、上には狛犬が安置され、一方のヨリ古いものにはこの方柱がなく、塗籠の左右に四ツ目に切抜た窓があつて中を窺けるが、併し眞暗で何も眼に止る事は出来ぬ。全體の構造から云へば尙家累代の墳墓たる首里の靈御殿を小にしたも

ので、明らかに庶人の墳墓ならぬ事を示して居る。そしてこの二個の墳墓の前面中央に建られてゐるのが、琉球文で記せる最後の金石文として著名なよう、とれの碑である。知らず、よう、とれとは何を意味するが、またこの莊嚴なる墳墓の中には何人の骨を藏めて居るか。

余と同行した謝花君は社寺係を勤めて居る琉球人で、比較的墳墓の事や何かに詳しい人であるが、このよう、とれといふ詞については、世絶の轉訛であるといふのと、世衰への約語であるとの二説があると語り、それには尙寧王が自から慶長の禍難を招けるを咎め、遺命して尙家の墳墓に葬むらしめず、遺骸をこゝに運ばせたといふ口碑があつて、よう、とれの稱もそれから起つたのだと聞て居るとの事であつた。

余は取敢ずよう、とれの碑を讀うと企て、見た。併し表面は甚しく磨滅して居る上に、讀るところでも『うらおそいよりしよりにてりわがりめしよわちやこと——』といふやうな三百年前の琉球文であるから少しも分らぬ。謝花君にも何の意味やら分らぬのだ。切角鍵を見つけても開く事が出来ぬ。

併し碑の裏面を見ると極樂山碑文とあつて萬曆四十八年の年號が刻まれてゐる。さうすると尙寧王の在世中に建られたもので且つ『うらおそい』のよう、とれ』といふ文字が處々に散見するところから見ると、尙寧王をこゝに葬つたためによう、とれの名が起つたのではない事が明らかになつた。よう、とれの名の起原は他にあらねばならぬ。こゝで當

然疑問の中心となるのは、尙寧王の墓（後これは尙家で確めた）でない方の一方の古い墳墓である。謝花君は誰の墓か判らぬが廢藩の際こを開いた時に、周圍に輪になつて人骨が散ばつて居て、殉死の跡が歴々として居たと聞いて居ると語つた。よう、とれと關係があるのは何うしてもこの方らしい。余は何となくこれが舜天の墓ではないかといふやうな感を起した。併し何等の解決をも得ずにこゝを出て、再び寺に立寄り、よう、とれについて尋ねて見たが更に得るところは無つた。寺僧はよう、とれの名についても墳墓そのものについても何の知識も無いのである。併し余は後に至つて次の事だけを知る事が出来た。

乃ちよう、とれの碑文は「浦添のよう、とれは英祖以下の墳墓の地なる

が故に清掃怠る勿れ」との意を記したもので、別に琉球には記録の存するものはないが、この碑文を唯一の材料としてこゝを英祖の墓と認める外はないといふのである。英祖の墓とすればよう、とれは英祖の統がこゝで絶た、若くは衰へたといふ意味に取る事が出来る。併し英祖の墓に極つて了ふと、舜天の縁は全く絶えるが、一寸こゝで注意の價値のあるのは、英祖は舜天の死後二十二年に舜天の孫義本の禪を受けて王となつたので、英祖の死は舜天の死を去る事僅かに六十年に過ぬといふ事實である。たゞ僅かに數十年の差あるに過ぬのに、英祖の墓のみがあつて、舜天の墓はどこにも見出す事が出来ぬといふのは寧ろ怪訝に堪ぬ次第ではあるまいか。英祖がその四十年の治世の間嘗て刑を

用ゐず、その死を聞いて百姓皆號泣すと史に記されたほどの明君であるから、後世長くその墳墓を存したのであらうといふなら、琉球中興の祖として生民を塗炭の苦より救ひ、五十年の太平を致した舜天の墓は、なほ更保存されてあらねばなるまい。

要するに舜天の墓は必らず無いのではなく、たゞ未だに発見されぬのだといふ事には、誰も異存は無いので、夫にしても僅かに二十年を隔て、王位を襲た英祖の立派な墓があるのに、舜天の墓の見出されぬといふ事は、實に大なる恨事と云はねばならぬ。云ふ迄もなく舜天を葬むるに最も相應しいところはこの浦添で、また舜天自らも幼少より人となり、中山に君臨するまで住んで居つた故山に骨を埋めん事を

望んだに相違あるまい。若しこのようにそれを英祖五世のようとはならず、舜天三世のようとはして、墓を舜天のものに見たなら、如何にようとの趣味を深からしむるであらうか。併し事實を矯める事は素より出来ぬ。たゞこゝを英祖の墓とするならば、また英祖が琉球に始めて墳墓を築いたといふ事を事實とするならば、彼はまづ舜天の遺骨をこのようにこれに改葬し、若くは遺骨のあるところに墳墓を築き、併せて之を自家の墳墓としたのではあるまいか。余はこのようにこれには、また解釋し得ぬ秘密が存して居る者と認めて置たいのである。

(六) 牧湊の遺跡

牧湊は即ち牧那渡で浦添城から見下し得るところにある。小さな牧湊川が流れ込んで灣をなして居るが、海底は浅く珊瑚礁が所謂干礁を形作つて居るから、船舶の碇繋には適して居らぬ。爲朝がその別離に臨み夫人に與ふるに赤地錦の直垂、澤瀉絨の鎧、龍頭の冑、重藤の弓大中黒の矢、黄金作の太刀を以てしたといふ一事は頗る小説的に聞ゆるが、たゞ彼が厚く尊敦の養育を托して、こゝから船出したといふ事は世鑑に記すところで、まづは事實と見るべきものであらう。王代略記には、

「爲朝歸國を思ひ立ち、妻子を具して出帆し玉ふ。然るに偶颯風吹起り、波逆巻て船將に覆らんとす。船人皆曰く、此船婦人を乗せ

たり。故に龍神これに崇る。願くは婦人をこの浦に上陸せしめて多くの人命を救ひ玉へと。爲朝詮方なく婦人及び尊敦を牧湊の浦に上陸せしめて再び解纜し玉ふ。婦人は幼子を携へて浦添に赴ひ、破屋の裡に月日を送り玉ふ。」

とあるが、今日その紀念と稱する洞窟が海岸に存して居る。それは爲朝夫人大里氏が別後追慕の念止み難く、數ヶ月の間この窟内に住み、爲朝の再來を待つて居たところで、乃ち待港であつたのを、まことにまきと土音相通するところから牧の文字を當て候たのだといふ。洞窟は琉球に見る普通の珊瑚窟であるが、土民はこれを尊稱して「寺の洞」と稱し、拜所にしてあつて、窟内に多くの香爐を具へ、板線香の燃

しが堆かく残つて居る。しかも之とても運天の爲朝窟同様で、果してこゝに大里夫人が籠つて居たかどうかは疑問である。思ふに爲朝出帆の悲劇に附會して作り出された空想的産物であらう。それにしても爲朝を紀念するためにかくの如き塲處の今日に存して居る一事は、決して、旅客を失望せしむる性質のものではない事をこゝに明記して置かう。

結 論

琉球本島における爲朝の遺跡はまづ以上に盡て居る。余はすべてこれ等の遺跡が今日如何なる状態にあるかを十分に説明し得たと信ずる。併し余の主とするところは、單に遺跡の探討のみではなく、これ等の遺跡を中心として琉球の自然を寫すにあつたから、爲朝の研究としてはやゝ方角違ひの、頗る不満足なものであつた事を自認するに躊躇せぬ。併し爲朝の史蹟を研究しやうとしても、すべてが湮滅に歸して居る今日、正確なる資料を得る事は全然不可能であると云つて善い。要するに「はしがき」にも述べた通り、今日は結論だけが残つて居るので

これを歸納する材料は何も無いのである。

たゞ最後に重ねて繰返して置たいのは、琉球に爲朝に關する史料の乏しい事が、往々爲朝の渡來を否認する有力の根據となる點である。外國には六千年前の歴史を有せる埃及の如きもあるが、琉球の有史時代は僅かに舜天から始まるので、今日に至つて七百年を數ふるに過ぎぬ。琉球の開關以來君臨しつゝあつた天孫氏はその二十五世に至つて亡びたと記されてあるが、その亡びた王の名も傳はらねば、二十五世間の事蹟については何一ツ判つて居るものも口碑に存して居るものもない。これは舜天がいろはを教ゆるまで、文字の無つたためであるかも知れぬが、わが國の鎌倉時代以前の事が琉球では闇黒であるといふ

に至つては驚ろくべき歴史の闕漏と云はねばならぬ。従つてこの闇黒時代に僅か四五年の足跡を止めた爲朝の事蹟が満足に今日まで残つて居やう筈のない事は識者を待たまでもあるまいと思ふ。殊に對支那政策上日本に關する事物の破壊に勉めた跡が明かであるのに、それ等の事情の外に超然として、その結論だけでも正史に、はた口碑に傳つて居るといふ一事はたしかに史家の活眼看取を要する點で、余は内地の史蹟を詮索すると同一眼光を以て徒らに抹殺を事とするものに與する事は出来ぬのである。

且僅かに四五年間の遺跡としては運天、和解武、浦添、牧湊の存する必らずしも之を少しとせぬ。否かゝる短日子間には是等の遺跡を残せ

るのみか、今日琉球人をしてなほその餘烈を仰がしむるほど、當時の人心を爲朝が收攬し得た一事は寧ろ奇蹟の如く感ぜられる。乃ち頗る小説的であるからこの點より却て爲朝の渡來を疑ふものを生ぜぬとも限らぬ。併しこれには琉球と内地の種的關係、人文發達の順序等を考へて見る必要がある。これは爲朝の渡來を解釋するために重要な鍵であらうと思はれるのに、餘り顧みられて居らぬのは余の遺憾に感ずるところである。これについて少しく辯を費やさう。

琉球の原人如何は別問題として、**琉球**に於る人文の發達は常に北より南して居る。わが天孫人種が南下して次第に琉球諸島の主人となつた事は明らかにその跡を求める事が出来る。琉球開國の祖を天孫氏と

稱して居る事も、決して史上の偶合のみではないと信せられる。

琉球の土地の名を見ても北が上で南が下である。琉球各島の島頭といふのは必らず北で、島尻は必らず南になつて居る。日本の文化は南から北に及んで居るが、南から北に流れるのは世界文化の潮流である。琉球はかういふ風に天孫人種が南下して來たところで、北方の勢力が常に南方を威壓して居る。支那の歴史によると隋以降屢々琉球との交通若くは征服を企て、いつも失敗に終つた跡がある。明以後支那の勢力は大分扶植されたけれど遂に琉球の主權を犯す事は出来なかつた。明治に入つて琉球が明確に日本の國籍に入つたのは自然の勢である。かくの如く南方の勢力は扶植され悪いが北方からすれば常に成功す

る。琉球人は昔から日本を母の國と云つて居るが、實際日本は琉球に對して母國の位置を占て居るもので、殊に社會が蒙昧であればあるほど祖先崇拜母國信賴の觀念は強烈であるから、母國の偉人爲朝が勇姿堂々として國頭の一角に上陸した時に、今日の鬼神なりと稱して潛伏崇拜の誠意を致した有様は直にこれを想像する事が出来る。従つて四五年の短日月間に非常な勢力を扶植した事は決して怪しむを要せぬ譯である。且爲朝が南方首里那覇の邊に上陸せずして北方運天に上陸した事も自然の勢を得たもので、運天の上陸といふ事に既に彼が成功の教訓はある。若しこれに反し南洋若くは福建の邊から琉球征服に出て來たものであつたなら、爲朝の二倍の強勇を以てするも島民を歸服

せしむる事は絶對的に不可能であつたに相違ない。即ち爲朝が僅かに數年間に絶大の人望を收め得たのは彼の個人的感化以外更に加ふるに琉球人の母國崇拜の觀念を以てしたからで、従つてまた爲朝に對する琉球人の觀念があらゆる利害問題の外に超然として今日に及んだものであらうと信せられる。この點から見ても余は爲朝の渡來を無する説を排斥せんとするものである。

余は最後に沖繩縣民の一顧を煩はすべき問題を提供したいと考へる。それは舜天神社の設立である。よし爲朝の渡來については猶異説を存するとしても、舜天が事實における琉球開國の祖たり、また文化の祖である事は何人も認めて居るところ、舜天あつて始めて文字あるの民

となり、始めて歴史あるの民となつたのであるから、これを記念する事はその祖先に奉ずる所以であるのみならず、また琉球人自ら重しとする所以であらう。祖先崇拜の觀念は國民に取つて極めて貴重の觀念である。余は切に沖繩縣民と、舜天の裔たりと稱せられる尙家の熱慮を求めたいのである。沖繩の統治に偉績を挙げ、はた沖繩を以て墳墓の地と覺悟して居られる奈良原知事の一考をも煩はしたい。これ獨り琉球の歴史を尊重する所以なるのみならず、また治民上の政策たるを失ふまいと信ずる。若夫舜天神社を設くべき地所に至つては浦添城に越すものはあるまい。

(以上四十年一月—二月「大阪毎日」掲載)

離島めぐり

はしがき

201
は し が き

三月五日の午後倏忽として琉球近海に颶風起り、漁船八十餘隻或は沈没し或は行方を失し、沖繩縣廳よりは急速汽船仁壽丸を派して近海を搜索せしめたる椿事あり。而してこの暴風はなほ三日三夜吹荒れ、二日の小康の後一日また大いに吹荒れたり。余の「離島めぐり」は恰かも颶風發生の當日那覇を發せる小汽船連輸丸に搭じて沖繩本島に屬せる離島粟國、渡名喜、久米、慶良間諸島の巡覽を企だてたる余が、如何にこの吹續ける暴風に遭遇したるかを、一面に説明せんとするものなり。歸來靜かにこの行を考ふれば余は實に生死を賭してこの記事

を得たるなり。如何に余の爲に高價の記事なるよ。然れども由來低氣
 歴と暴風とは琉球の名物なり。余の如く離島めぐりを試みんとするも
 のあらば、豫じめまづ多少の覺悟をなすを要す。余の遭難の如き偶
 以て險惡なる黒潮の間に散在せるわが離島の地位を説明せるに外なら
 ず。こゝに離島の記あつてこゝに颶風の記あり。これ蓋し琉球にあつ
 ては自然の數たらんのみ。

三十九年三月那覇にて書す

粟 國 島

(一) 那覇を發す

奇なる運命は余をして琉球本島を語るの前に、まづその離島を説かしめんとす。

總噸數百五十噸登簿噸數僅かに八十餘噸に過ぎざる小汽船運輸丸は、その命令航路たる慶良間、粟國、渡名喜、久米の四島を巡航して三日の後再び歸着すべく、三月五日午前九時を以て那覇港を發しぬ。余は東道の主人たる島尻郡書記河野瞳氏と共に船内にあり。この日風なく暖やかに近頃の沖繩に珍らしき日和なれば、船客はみな今日の幸を喜

び合へり。

船はまづ栗國に向ふ。那覇を距る事三十一湮なり、那覇を出で、一時間にして左舷に珊瑚島の横はるを見る。高さ二三十尺、長さ數町、コバの木即ち檳榔（或は蒲葵樹）これを蔽うて、腰を繞る白砂と相映發し、二段の染分をなせるに、更にこの小島を中心として、稍不規則なる楕圓形に圍繞せる珊瑚礁あり、潮これに激して不斷の白波を擧ぐるさま、眞に一奇觀を呈す。遠くこれを望む時は、穩やかなる海上約十數町に亘りて雪白の垣を築き上るが如く、次第に近づくに從つてこの雪白の垣のコバの葉青く砂白き小島を圍繞せるものなる事を認むるを得べし。若しそれこれを高さより俯瞰せば、如何にその奇觀を増すべ

琉球人は島を慶伊島といひ、一帶の暗礁を慶伊干礁といふ。

この珊瑚島を離るゝころより穩やかなる日和ながら、聞えたる荒海なり。船體は小なるに、波のうねりに揺上げ揺下さるゝ心地快からねば。余は毛布に包まれで甲板の上に横はる。久米島の商人あり。語りていふ、今日の空模様はいと悪し、夕刻に至れば空崩れて意外の荒となるべし。船長始め船員はみな知らざるなりと、いたくそを氣遣ふさまなり。

それより二時間ばかりを経て、午後一時三十分船は栗國島に着く。

(二二) 憐れなる栗國島 (上)

余は運輸丸の事務員と河野氏と三人にて本船の短艇に乗り、島に漕寄せぬ。島は沿岸珊瑚礁より成り、蝕ばめる巖岸を繞り、短艇を着くべき方僅かに開きたり。海岸には涼笛の音を聞て至島を擧りて出来るかと思はるゝ多くの男女、殊に小兒等蟻の如くに集ひ佇ずめるを見る。そはこの島に毎月一回の定期航海われど風波に妨げらるゝ事多くして、時には二ヶ月一回に止まる事さへ多く、島人の待設くる事切なるに、かくは物珍らしく海岸に集ひ來れるなり。

漸やく近づけば二百に餘る男女、いづれもつぎはぎの見苦しき衣裳を纏へるが、余等と前後して本船の方より漕ぎ寄せたる列舟傳馬などにひしと寄添つ、余等はこの間を抜けて島役場にと志ざし、磯礫たる

珊瑚巖もて成れる道を踏みて進む。至島山なくたゞ丘陵の起伏せるのみ。丘には一の樹木ある事なくして、この不毛の土を裝飾すべく蘇鐵の簇生するを見る。島の中央部僅かに耕地あり。これに麥と甘藷とを植ゑたり。島は東西一里二十六町、南北二十五町、周圍三里に充ぬ一島ながら、現在戸數は八百十戸、人口は五千百七人に上れり。一里平方の地に五千餘の人を容るゝの地は餘り多かるまじ。耕地少なくて人餘りあり。生活難の生ずる事また無理ならず。この島のものみならず多少の盗心なきはなく、親戚故舊の那覇より歸着せるものを迎へて、まづ第一に發する言葉は何か儲け來れるかといふにありて、その意米若くは味噌或は布切の類を盗み來れるかを問へるなりとは驚ろくべ

し。然れども余は海岸に蠢爾たる彼等を見てその惡むべきよりも寧ろその憐れむべきに打たれぬ。乞ふ彼等が日常如何に薄き天恵の下に生活せるかを見よ。

彼等は殆んど食ふべき食物を有せず。粟國の自然を飾る美はしき蘇鐵は、彼等のためには實に一日もこれ無かるべからざる生命の鍵たるなり。米なく粟なく甘藷なき——有るも素より需要に充るに足らず——島民は僅に蘇鐵の幹によつてその腹を充し、薪を有せざる彼等はまた僅に蘇鐵の葉によつて、炊烟を揚げ居るを見ずや。余等を迎へたる島役場の吏員は曰く、我等は目下米を絶ち、粟と麥とによりて僅かに腹を肥し居れりと。役場員然り、島民に至つては嘗て米の飯の口に入る

事なく、たゞ非常の珍味として南京米の粉米の輸入せらるゝあるのみ。平常口にするところのものは即ち蘇鐵の幹より製せる粗惡の澱粉と、少許の麥若くは甘藷をつき雜て製せる、内地にては犬も食はぬ食物なり。

(三三三) 憐れなる粟國島 (下)

かくの如く彼等は食物を有せざるのみならず、また常に飲料水に苦しめられ居るなり。飲料水を出せる井戸は海岸に只一個を有せるのみ。この井戸は船着の邊にあり。島民は實に十町餘の磊塊たる石坂道を辿り來りてこゝに水を得ざるべからず。而も五千餘の人只この一個の井

戸を有せるのみなれば、井戸の周邊は終日婦人の市をなし、順番を定めてこれを汲み居るを見る。されど大抵殆んど二斗五升を容るべき大なる桶に、コバの葉を編たる手製の釣瓶にて凡そ五尋の底より汲み上げるなれば、釣瓶より桶に移すころには水は三分以上を漏りて容易に桶に充つべくも見えず。時間の觀念なく又その必要を悟らざる彼等は、敢て意とせずして靜かに己が順番の來るを待てるなり。かくて桶を波々と充し得ればこれに木の葉を浮べ、頭上に頂きてまた十餘町の石高道を上下し歸る。十貫目に垂々たる重き水桶を頭に頂きて都人の徒歩なほ行惱むべき石原を平氣に歩み行く島女の働き振こそ目ざましけれ。されど風雨の折にはさすがに彼等も困難を感ずるとは左もあるべし。

聞く偶々日照續に出遭ふ事あれば井水は忽ち減少を告げ、役場員はこの井戸に出張して嚴重に監視し、一人何合を限りて之を給する習なりとぞ。かくの如くして得たる水の彼等に取りて貴重なるものなる事知るべし。

村の有様は沖繩本島の田舎に見るが如きものを更にいぶせくしたるもの、怪しげなる萱葺の堀立小屋に素より疊もなければ、葦だも無きが多く、かくても家の周圍には珊瑚岩を堆積せる石垣を繞らしつ。そはいづこに行くも見るを得べき琉球の特色なり。たいかゝる伏屋に相應しからぬは徑四五尺より三尺の大ききなる美事の石壺二ツ三ツを家に備へぬはなき一事なり。これは他の琉球地方に見るを得ざる處なる

が、それはこの島の北部より切出せる軟弱なる石材をもて製せるものに、何れも雨水を貯ふる用意なり。

余は垣に植えたる榕樹、または梯枯の幹に繩を括りあるを見、これを怪しみたるにそれは雨の時幹を薄ひ下る水を、この繩によりて水壺に流れ入らしむべき用意なりといふを聞いて、何とは知らず俄かに胸迫りぬ。あはれかくても人は棲み得るよ。耕やすに田なく樵るに薪なく、食ふに食なく、呑むに水なく、なほ營々として蝨めくは生ながらにして餓鬼道に入れるならずや。かくて道遺たるを拾はず、人に盗心なしと云は、島人は悉く聖人なるべし。余等は寔に天恵の多きに感謝せざるべからずと思ふに、そゞろに涙催はされたるなり。

余等は海岸より十二町ばかりを歩みて島役場に来り、船内にて食事を認めねば、村内より卵を徴發せんとし、直ちに使丁を出しやりたるも、その卵だにいづれの家にもなしとて三十分の後使丁は空しく歸り來り。こゝにて余は島民の生活費一人一日二三錢より四五錢の間にありといふを聞きて、思はず内地の乞食の贅澤に想到しぬ。而も驚ろくべきは此くの如き憐れむべき一小孤島にして五百餘名の生徒を收容せる小學校を有し、その就學歩合も百分の八十九に達せる一事なり。聖世の餘澤尙この邊陲に及べるを見て誰か感泣せざるものあらんや。余は島に止まる事凡そ四十分にして栗國を辭し、役場より贈られたる一羽の鷄を得て再び本船に乗込めば、わが運輸丸は午後二時半を

以て碇を揚げ渡名喜島を指しぬ。先の久米島の商人余等を見て曰く、
 いよ／＼天候不穩の兆を示し來れり、而も船員はなほ知らざるなりと。
 余は聞いて心にかゝりたれども他の船客等は冷やかに聞流して敢て意
 に介せざるものゝ如し。

渡名喜島

(一) 颶風殺到 (上)

粟國と渡名喜と相距る事十四海里なれば船は二時間にして到着する
 を得べし。余等は毫も天候の異常を認めざるも、波の動搖に對しては
 鋭敏なる神經を有す。これを粟國に到るの以前に比するに、發してよ
 りは甚だしく波濤のうねりを増し來れるを感せるに、たゞ毛布を被り
 て甲板の上に横臥し居りぬ。かゝる際に最も待たるものは船の錨地
 に着ん事なり。一刻千秋の思を以てすれば二時間もなほ長き事日の如
 し。かゝる時余は甲板の上にて「もう來た」と呼ぶ聲を聞き、倏ち不

快の感を挑發されぬ。怪しむ勿れ、余は聲の主を知れるなり。曩に那覇を發して粟國に向ふの時慶伊干礁を離れて幾十分の後「もうすぐだ」と叫びたるはこの男なり。余はその折横臥せるまゝ時計を取出し見たるに僅かに二時間を過たるのみにて、粟國までは四時間半の行程なればなほ半にも達せざるべきを知りて、敢て起出見んともせざりき。暫らくうとくと眠りに入れる耳元に再び同行の河野氏を揺起して「あ」と一海里だ」と叫ぶ件の收税吏——然り彼は收税吏たりしなり——の聲を聞けり。運輸丸の速力は一時間約七海里なれば、よし彼が三海里を誤り見たりとするも、なほ廿五分間にして到着すべしと、余はいたく心のくつろぐを覺えつゝ、待構へ居たるに十分を過ぎ二十分を過る

も未だ汽笛の聲を聞かず、而も聽て三十分を過ぎ四十分を過たる頃、彼又叫んで曰く「もう着いた」と。今もし四十分を過たりとせば船は既に粟國を突抜て更に四海里の先に居るべき筈なるに、かくてもなほ汽笛の聲を聞かぬのみか、着たといふに更に速力をだも弛めざるこそ奇怪なれ、この男全く常識を有せざるならんと余は始め彼の言に慰さめられたるを腹立しく尙横臥し居る中、彼が着いたと叫びてより約十分を経て始めて汽笛鳴り、更に十分を経て船は漸やく進行を止めたるなり。渡名喜に向ふの途次、更にまた「もう来た」を繰返せる彼の言を聞いて、余の激せるもの、必らずしも理なしとせじ。果して彼が叫びてよりなほ四五十分を費やして船は四時半始めて渡名喜に着けるな

り。

余は栗國におけるが如く東道の河野氏及事務員と共に本船の短艇によりて上陸しぬ。こゝには他に一人の船客も一個の貨物の陸揚せられたるものもなかりき。こゝも海岸には百餘の島民物珍しげに集ひて入來る汽船を見物し居るを見受けぬ。されど著しく余の注意を惹きたるは渡名喜が、栗國の島形の平凡なるに似ず、これは全島突兀として時つ火成岩より成り、その秀拔なる外觀の非常なる相違を示せる如く、渡名喜島民の衣服が栗國島民の衣服と異りて甚だ清潔なるの點なり。

出迎ひたる島長役場員等と共に海岸に打建られたる村に入れば、地

盤は全く他の琉球諸島に多く見ざる砂地にして、今まで到る處に蹈馴れ蹈惱みたる石原道と異なり、歩むに心地好く、殊に不思議なるまで清らかにして塵だも止めず、緑樹家を圍み、家は多く瓦葺にして、沖繩本島の民家には見るを得ざるまで清潔なる、すべての様意思の外なるに、いたく余の好奇心を高められぬ。余はこの奇異なる島を視察したしとの念に驅れたるも郵便物の整理次第直ちに船に返る筈なれば、遺憾ながら毫の餘裕もなく、役場に止まること、僅かに二十分にしてそこへ引返し、午後五時海岸に出で、再び繋ぎ捨てたる短艇に乗込みぬ。短艇には島人より余等の買入れたる大鯛一貫六七百目のもの三尾を積載せたり。この鯛一尾値僅かに三十錢、那覇にて求むるもな

は一圓を要すべし。島にての値はすべて斤目を標準とし、生魚は時價一斤三錢をもて販賣し居るなり。

(二二) 颶風殺到 (下)

余等の短艇は余等三人の外にこの島に來り居たる巡查部長某と舟子三人と併せて七人に乗せ、岸より一漕以上の沖にかゝり居る本船を目がけて漕出でたるなり。この時空模様は次第に悪しく沖の方はやがて降出ん空合いと怪しきに、久米島の商人の言葉も思ひ合はされて、力の限り漕ぎよせよと舟子を勇むる折柄、忽ち沖を掠めて殺到し來る一陣の颶風あり。あなやと思ふ間に余の帽子を横さまに拂うて遙かに

海中に吹飛ばしぬ。短艇を漕戻して幸ひにそを拾ひあげたれど、幸先惡きに胸を惱す程もなく、海面俄かに騒立ち來りて、北より吹まくる疾風面を向くべくもあらず、所謂干礁に激する白波俄かに湧くが如くわが短艇を打つて碎くる飛沫雨の如くわれ等の衣を濕しぬ。岸をば既に七八町離れたるほどの事にて、見送り來れる島人も既に村に返り、吹まくる風肌寒さに岸には人の影だも見えず。われ等は是非とも本船に漕つけざるべからず、而も本船とはなほ十町餘を離れ、干礁の鼻を出るにもなほ二三町漕出るを要す。

干礁は即ち一面に沿海を鎖せる隠れたる珊瑚礁にして、われ等の短艇は今その上を漕つゝあるもの。干礁の盡る處より海は俄かに深みへ

陥込おちこむなり。この干礁ひせの盡つきんとする鼻はなには平隠へいおんの日ひと雖いへも常つねに白波立しななみだ返かへり居をるほどなれば、今吹いまふまくる磯風いそかぜに激げきする波なみの高たかさの如何いかに物凄ものひきばかりなるよ。あれ等は此間このあひだを漕拔こぎぬざるべからざるかと思おもふに座まに肌はだに粟立あはたちぬ。而しかもこの干礁ひせを越こゆるも本船ほんせんを隔へつる沖おきの波なみの宛まから一起いっ一伏ぶくせる丘陵きやうりやうの如ごときを如何いかにすべき。危険きけんなれば漕戻こぎかへせと叫こゝろびたるは河野氏かんのしなり、同じく聲こゑを合あはせたるは巡查部長じゆんさぶちやうなり。短艇たんていには既すでに浸水あかみ満みちて深ふかさ二寸すんに及およべり。船子ふねこはなほ意いとせずして進ままんとするかゝる時眞面ときまへより起おり來きれる大波船おほなみふねより蔽おほひかゝりてドツとばかり艇ていに打込うちこみ、河野氏かんのしの半身はんしんを濡ぬほしぬ。余よはひやりとせる間に艇ていは辛かたくも其位置そのちやうを回復くわいふくしたりとされど舟子ふねこは曰いはくたゞこの目の前まへの大波おほなみのみ、

これを越こゆれば本船ほんせんに漕こつけん事こと必かならずしも難かたからずと。彼等かれらは是非せひとも干礁ひせの鼻はなを漕出こぎだんとするなり。かくて無益むえきに怒濤いかづたと戦たたかふ時眞白ときましろにまくれ立たてる第二だいにの高波たかなみは山やまの如ごとく蔽おほひ來きりて、また艇ていに打込うちこみぬ。この時艇内こゝの浸水しんすい既に靴くつを没ぼつし、艇ていは早くも水船みづぶねとなれるなり。こゝに至いたつては余等極方よらきよくりよくふたご舟子ふねこと争あはざるべからず、三人連呼にんれんこゝして艇ていを戻かへせと呼よはる。舟子等ふねこらはよし轉覆てんぷくせりとも彼等自身かれら自身の生命せいめいに別條べつじやうなしと信じ、敢あへて冒險ぼうけんを試こみんとせるなり。されど彼等かれらも今は如何いかんともなし難かたきを見て空しく沖おきを望のぞんで茫然ぼうぜんたる刹那せつな、第三だいにの高波たかなみは横よこさまに艇ていを打うち來きり、こたびこそあはや轉覆てんぷくすべく覺おぼえて、ハツと膽きもを冷ひやせる時、幸さいひに短艇たんていは淺あき干礁ひせの上うへにありたれば僅わずかかに糧かひを突立つきたて、支さふ

る事を得たるこそ天の祐なれ。されど危なきかな。生命と頼む機は同時、その繼目より折去たるなり。

さはれ余等は櫂の折れたる事に感謝せざるべからず。そはこの一事無謀なる舟子等の冒險を斷念せしめられたればなり。あゝ若しわれ等が干礁を出たる後、此椿事に遭遇せば如何。艇は進んで本船に達する事能はず、退いて岸に潰滅さんか、その艇を轉ずるの刹那、沈没を免がる如きあらば一個の奇蹟なり。余は實に生命拾ひをなしたるなり。

われ等は二挺の櫂により辛く艇を岸に返しつゝあり。この時本船よりは余等の危険を見たるためか、それかわらぬか、二たび三たび汽笛を吹ならしぬ。この汽笛の聲を聞いて島民は三々五々海岸に集ひ來れり。

後に聞けば必定わが短艇の轉覆せるならんとて走せ來れるなりといふ。われ等は追手にまかし濡鼠の如くなりて、十數分の後兎も角も事なく陸に上る事を得たり。途中本船は如何と願りみるに山の如き波浪に掀翻されて上下する様見るも恐ろしく、假令われ等の短艇が無事本船に到着し得たりとするも、到底乗移るの途なき事を始めて知りぬ。渡名喜島には一個の港だにある事なく、運輸丸は洋中に假泊せるに過ぎざれば、この暴風に遭ふては到底碇泊に堪ゆべくもあらず。余等が未だ陸に上るに至らざるに、本船は早く既に煙を擧て、一聲の汽笛を後にこゝより十一海里を隔つる慶長間島に向つて逃去れり。かくて余等は首尾よく絶海の孤島に置去られたるなり。

これを余が第一の遭難とす。若夫れ余が更に久米島を發せんとして及び既に發して遭遇せる第二第三の危難に至つては、今に及んでなほ余を寒心せしむ。されど余はまづ渡名喜島に如何にして三晝夜間を送りたるかを語らざるべからず。

(三三) 太古の如き小天地

本船に捨てられたれども生命を拾ひたりと思へば、島流しに等しき運命にも、なほ無量の趣味あるを覺ゆ。死んや余の心残れる小島を充分に視察するの機會を得たるをや。たゞ余等二人の最も當惑せるは那覇より携へ來れる寢具食品(蚊帳、毛布、米、味噌、醤油、砂糖、鐵

詰の類すべて船内に置き來り、着の身着の儘にて上陸せる事とて、差當り寢食に非常の困難を感ずべしと思はるゝ點なりき。然れども余等の取残されたる場處が、かの粟國島にあらざりしは偏に何等の幸福ぞ。いで余は如何に配所の日を送りたるかを語るに當つてまづ奇なる渡名喜島を諸君に紹介せん。

余は渡名喜島の住人ほど質樸にして、太古の風調を帯びたるものを見たる事なし。さればこの島民を紹介する事は、必らずや諸君に多少の興味を興へ得べき事を信じて疑はず。彼等は全島にたゞ一個の村落を有す。島は粟國島よりも小にして周圍僅かに二里半に過ぎる彈丸黒子の地のみ。那覇を距る事三十海里、戸數は全村百八十二戸にして人

口は男女一千百三十六人（三十八年末調査）を有し、耕地はたい僅かに八町弱の水田と八十町餘の畝とを有せるに過ぎず。他は花崗岩より成る突兀たる數個の禿山によつて圍繞され、こゝに蝸牛角大の天地を形作れるなり。

此村の道路が他の琉球本島及先島諸島において見るが如き、礮鋪たる珊瑚岩より成らずして、平坦なる砂地なると驚ろくべきほど清潔なるため、いたく注目を惹たる事は既に述べたり。これ素より地質の然らしむる處なりとは云へ、この島の舊慣として毎月四回日を定め島民悉く海岸に出で砂を運び來り、これを道路及び自家の周圍に撒布し、且つ併せて屋内の掃除を行ふを例とせるため、かくの如く清潔なるを

得るなりといふ。衛生の思想を有せず、不潔を意とせざる琉球人の中に、清潔の觀念を有する渡名喜島民を見る事は實に余の意外とするところなり。

彼等の家の構へ方もまた他と異なり、家屋の敷地はこれを四尺ほど掘下げ、その砂を四圍に積上げて幅約六七尺高さ三四尺の堤を築き、その縁を疊むに石垣を以てし、上には重に福樹を密植し、間々榕樹及よな木の類を隙間もなく植え込みたれば、風を防ぐの用意には所謂寸分の隙だもなきのみならず、道路の風致を添ふることその幾干なるを知らず、路幅は大抵六七尺なるが砂白く塵たも止めざるに、兩側の綠樹枝を交え、半熱帯圏の豊かなる日光を受けて牙え渡れるその葉色目

覺るばかりなれば、さながら公園地の間を逍遙するの心地す。これは實に首里那覇の邊に見るべくもあらぬ美なる光景なり。

深き砂地なるが故に汚水の停滯せるところなく、従つてまた何等の臭氣なし。更にこの島に特筆すべきは、琉球本島及びその他の諸島いづこに行くとしてか一年中蚊の居らぬ處なきに、この島のみは盛夏の際と雖も一匹の蚊を見ずと云へる一事なり。多謝す、余が蚊帳を船内に残し來れる憾の直ちに拭はれたることを。

耕地の少なき事は寧ろ粟國の比例以上なり。されど渡名喜島民は巧みなる耕地の經濟を知れり、彼等は三月には悉くその甘藷を掘起して貯藏し（甘藷は琉球にては一年中生育す）苗代に作り置ける粟を植

かふ。かくて五月に至り粟熟すれば、直ちに苜取りてまた甘藷を植うるなり。粟を苗代に作れるは思ふに内地にもその例なからん。

島内の男子は皆漁業を營み、一年の半以上は久米島その他の漁業地に出稼してあらず。農業はすべて女子の負擔にして、牛を牧し豚を養ふもまた悉く婦人の手業なり。島女の勤勉なる寧ろ驚ろくべく、朝には鋤を携へてその三面を圍める高き山の阻に、石を崩し土を拓きて麥を作り、夕べにはまた牛を追ひ羊を追うて家路に急ぐ。

風俗はその容貌にも知らるゝ如く淳朴にして、一村たりこれ一家の如く、有無相通じ吉凶相補け、道真に遺たるを拾はず、夜戸を鎖さず、誰咎めざれど、一本の枯木を折るものなければ、一塊の甘藷を盗むも

のもなし。駐在の巡查詰つて曰く、この島には嘗て犯罪なし、只十年間に一回の毆打犯ありたるのみと。所謂無爲にして化するもの、遠き葛天氏の民のみにあらず、われ今目前にこれを見る。島役場の吏員は曰く、廢藩以來この村より一人の租税滞納者を出したる事なしと。而して島民はみな一年間の貯蓄を有すといふ。

(四) 太古の如き小天地 (下)

最も奇とすべきはこの島に商品を販賣する一個の店だもなく、従つて半個の商品だもあらず一仕事なり。本島との交通一年僅かに七八回に止まる絶海の孤島にして、何等の商品をも有せずせば島民の不便果

して如何ぞや。然れども彼等は商品なきを不便とするほどに複雑なる生活を營なみ居らぬなり。否彼等は島内に賣店を設くる時は、島民に冗費を生せしむるの媒たるべしとなして、賣店を置かざるの申合せをなせるなり。勤儉質素の風もこゝに至つては極端ながら、島民が敦樸の風また察すべきにあらずや。五戸の村十戸の邑にも内地にありては、小兒等を相手の駄菓子屋なきはあらぬと、この島にはかくて一軒の駄菓子屋だにあるを見ず。また沖繩本島の如く甘蔗をも作らねば甜るべき黍だにある事なく、従つてこの島の兒童等は毫も間食をなす事なしといふ。また怪しげなる飲食店とてもなければ、青年の風儀を紊るべき機關絶えてある事なし。男女の風俗は珍らしきまで清潔にして

夜間妙齡の女子は絶えて外出せず、泡盛は琉球人の最も嗜む處にして彼等の生活を觀測すれば泡盛なくして一日も生存する能はざるの觀あれども、渡名喜島民は平日泡盛を飲まず。その大に飲むは僅に正月と祝日とのみなるに至つては、之も琉球人中に一の異例を作るものといふべし。

余がこの島に宿れる第一夜、近隣に太鼓を打ち婦人の唄ひ連る、聲を聞けり。そはこの日の郵便にて屢に出征せる軍人よりの消息あり。爲めに親近老幼の婦女相會し、無事を喜びて祝歌を連唱せるなりと。余出で、靜かに暗きより窺へば、凡そ十人の女子一室に相會すれども、酒なく肴なく菓子なく、たゞ茶を呑みては鼓ち且つ唄ふのみ。席上素

より一人の男子をも雜へず。琉球の俗男女相會して歌ふが如きは他にありても亦見るべからざるなり。余は端なく太古に於る鼓腹擊壤の民を想ひぬ。

渡名喜島民はまた沖繩縣下における衛生上極めて良好の状態にある最健康の民として知らる。而も島内に一人の醫師なく産婆なく、また一包の賣藥だもなきに想ひ至りて誰か奇異の感をなさいらんや。たゞ一壘の苦味丁幾を有せるは學校の先生なり。腹痛を覺えては即ち先生に行き、發熱を感じてはまた先生に行く。先生の與ふるところたゞ數滴の苦味丁幾のみ。而も多くの病のこれに依つて治せざるものなしと云ふに至つては、また一個の奇蹟に類す。

夜間妙齡の女子は絶えて外出せず、泡盛は琉球人の最も嗜む處にして彼等の生活を觀測すれば泡盛なくして一日も生存する能はざるの觀あれども、渡名喜島民は平日泡盛を飲まず。その大に飲むは僅に正月と祝日とのみなるに至つては、之も琉球人中に一の異例を作るものといふべし。

余がこの島に宿れる第一夜、近隣に太鼓を打ち婦人の唄ひ連る、聲を聞けり。そはこの日の郵便にて屢に出征せる軍人よりの消息あり。爲めに親近老幼の婦女相會し、無事を喜びて祝歌を連唱せるなりと。余出で、靜かに暗きより窺へば、凡そ十人の女子一室に相會すれども、酒なく肴なく菓子なく、たゞ茶を呑みては鼓ち且つ唄ふのみ。席上素

より一人の男子をも雜へず。琉球の俗男女相會して歌ふが如きは他にありても亦見るべからざるなり。余は端なく太古に於る鼓腹擊壤の民を想ひぬ。

渡名喜島民はまた沖繩縣下における衛生上極めて良好の状態にある最健康の民として知らる。而も島内に一人の醫師なく産婆なく、また一包の賣藥だもなきに想ひ至りて誰か奇異の感をなさいらんや。たゞ一壘の苦味丁幾を有せるは學校の先生なり。腹痛を覺えては即ち先生に行き、發熱を感じてはまた先生に行く。先生の與ふるところたゞ數滴の苦味丁幾のみ。而も多くの病のこれに依つて治せざるものなしと云ふに至つては、また一個の奇蹟に類す。

琉球人は古へより兵器を解せず、徴兵令の如きも去る三十年始めて布れたるほどなるが、従つて従来琉球人の徴兵を恐るゝ事甚だしく、爾來毎年の検査にはそれを免がれんとして指を断つもの、眼を害ふもの、或は皮膚に毒液を塗抹するもの續出し、去三十五年の如き沖繩本島内某の一村二十六名の受検者悉く自己の指を断たる事實あり。漁業を以て聞え、殊にその水産學校を以て有名なる糸満の如き最もこの弊多く、鱧に噛切られたりと稱して指を断つもの頻々たるの例あるに拘はらず、同じ漁業を以て鳴れるこの島の壯丁は、他の久米島の壯丁と共に沖繩縣下に於ける徴兵検査の模範として知られ、一人のこれを忌避するが如きものある事なく、何れも喜んでその撰に入らん事を希ひ、

而も體格の美事に打揃へる壯丁を出す事この島の如きはなく、十人の受検者中八人は常に甲種合格を以て採用せらるゝといふ。

彼等の常食は甘藷を本位とすれども、昨年十月の暴風被害以來は蘇鐵本位となり、これに少許の甘藷若くは粉米を摺ませたるを常食とせり。副食物としては善く魚肉を食ふと云へば、彼等の食物は比較的營養分に富めりといふべきか。されど島内には野菜なく、彼等はたゞ甘藷の葉と時に或は桑の葉を食ふのみ。物を煮るに砂糖を用ゐず、また鯉節を用ゐず。鯉節は寧ろ贅澤なり。たゞ砂糖に至つては生活上の必需品たるべきを、彼等が毫もその必要を認めざるに至つては驚くべし。その生計費を算せるものを見るに、一人一日の費用上は八錢中は六錢

下は四錢。されどこは彼等の自から耕作せる甘藷粟麥の類を時價に引直したるものなれば、實際に使用する金銭は遙かに下れるを知るべし。眞にこれ太平無事の民なるかな。

島内に一個の尋常小學校あり。學齡兒童の數百五十九名なるに、現在の就學者は百六十四名あり。これ學齡外の男兒二名と女兒十二名を收容しあればなり。この十四名を控除するも、而も就學歩合實に百分の九十五に上る。わが内地の何れの學校にこの歩合以上に出るものあるや。余は教授の樣を一覽せるに、學齡外の女兒十二名はみな十六歳以上にして中には十八歳のものもありと云へるに、毫も之を恥るの體なく、怡々として他の幼なき女兒と伍し、出席し居るの風われは寧ろ

その可憐なるに打たれぬ。

あゝ美なる小島の自然は美なる小島の風俗を産めり。小島の自然はいつまでも異なる事なかるべし。われは小島の風俗のまた長へに異らであらんを祈る。

(五) 島人の心盡し

渡名喜島の村落を叙し風俗を叙したる余は、今まさに余の渡名喜島における生活を叙すべき順序に入れり。

五日運輸丸に置去らるゝや、余等は役場員、小學校長、駐在巡查等に導びかれて再び島役場に引返しぬ。途次余は船員よりかの久米島の

商人が、以前五百石積の和船の船長をなし居たる男なる事を聞得て、彼が天候の變を豫知せるの偶然ならざりしを知り得たり。役場に着きたる上にて、余と河野氏とは役場員上原某氏の宅に、運輸丸事務員と舟子等は某の宅に、それ〴〵宿割は定められつ、かくて余等二人はまづ導びかれて役場と隣り合せの小學校内なる校長宮城氏の寓舎に赴ひきぬ。

余等の最も懸念したるは米の有無なりしが、幸ひに宮城氏方にて、多少の持合せあり、醤油もあれば分たんとこの事に、何よりも心強さを感じぬ。晚餐には糺に買求めたる大鯛を調理せしむる事とし、かくて潮煮、刺身は出来上り、われ等は思ひも設けぬ美味に舌鼓打ちたるな

りき。晚餐後宿舍と定められたる上原氏方に導びかれぬ。

役場員は島長始めみな生拔の渡名喜人にして、上原氏方もまた土地の舊家なり。役場員はすべて内地語を解するが故に、われ等は上原氏方に來りても甚だしき不便をば感せざりしなり。瓦葺のこのわたりに秀でたる建物にして、われ等の借受たる座敷は六疊の間の疊もあれば、床には、軸物さへ掛られたり。家屋の用材も美事のものなるが、建築材と瓦とすべて那覇より輸入し來るものなれば意外の高價に上るといふ。聞く先年來島民は頼母子講の方法によりて瓦葺の家屋を打建つゝあり。その法十人乃至十五人一團となし、一人三四十圓を醸出し、當籤したるものは必らず家屋を新築する事と定め、爲に今日にては住民

の半ば美はしき瓦葺の家屋に住する事となりたるものなりと。聞く別にこの頼母子に對する制裁なけれども、島民は一文半錢だも決してこれを他の費途に流用する事なく、また一人のこれを私するものなしといふ。内地人が渡名喜島民に學ぶを要するもの一に何ぞ多き。余等は宿舍に就くや否や、いたく疲れ果たるにまづ寢に就くべき用意をなしぬ。生憎に暴風の襲來と共に、琉球には珍らしきまでの寒さを覺え來れるなり。われ等は着の身着の儘にて更に重ねべき衣を持たず。記憶せよ、琉球人は夜具を用ゐざる國民なるを。われ等は敷物として僅かに二枚の赤毛布を得たり。學校長の貸しくれたる一枚の薄き夜具と、兎角して役場員の周旋しくれたる三枚の裕とは、二人の間に

分配されつ。裕を有せずして寒き時はたゞ單衣を重ねるのみなる琉球人より、三枚の裕を得たるはわれ等に取つて望外の幸ひとせざるべからず。余はホワイトシャツを脱し、その上より洋服を着たるまゝ一枚の裕をひつかけ、校長が情の薄綿に包まれてその夜を明せるなり。家の周圍なる福樹を動かす風の音、沖に吼ゆる波の音と相和して物凄さばかりなるに、容易に眠なるべくもあらず。加ふるに蚤の襲來甚だしきをもてす。洋服を隔て、痒さを搔く氣持の悪さ云はん方なし。僅かに眠りを催はせるかと思へば、運輸丸の沈没せる夢におびえて、肌は汗にじととなりぬ。瓦には霰打つ音頻りなり。さても今宵の寒きことよ。余は琉球に來りて既に一ヶ月餘り、八重山にては八十五度

の暑さに扇遣の手もたるき思ひせしを、今日になりてこの寒さに遣はんとは思ひもかけざりき。

六日となりぬ。風は少しも止まず、ひた荒れに荒れ廻る。時には雨を交へ、また霰を交ゆ。かばかりの寒氣は數年來嘗て無きところなりと島人は語り、甘藷の葉の枯なんを打啣つ。そは彼等が嗜む唯一の野菜なるものを。常に七十度前後を往來せる寒暖計の今日は四十九度に降りぬ。寔に琉球にては珍らしき寒さなり。

校長より炭を贈られたるを何よりの情と、直に炭火おこしてこれに暖を取りつゝ、午前を宿舎に送りぬ。晝飯には島長の贈りものなる鶏を割て腹を肥し、午後雨の晴間に赤毛布を被りて海岸に出で貝を拾ふ。

されど吹飛されんばかりなるにすぐに村に引返し、今度は村繞りを試む。福樹に夾まれたる砂道を歩む心地云はん方なく爽やかなり。

午後五時役場の風呂湧きたりとして役場員來る。湯にでも入らねば凌ぎ難しとして今朝河野氏の注文し置たるなり。余はかゝる孤島に來りても、なほ入浴の快を取り得る事を喜びつゝ、役場に至り見ればこそ如何に、風呂は裏庭の吹曝しの中にありて、荒廻る寒風は容赦もなく火筒を上る黒煙を右往左往に吹亂し居れり。余はこの有様に避易しながらも今更入らぬ譯には行かず、いつそ一思ひにとまづ加減を試み置たる上、眞裸になりて一氣にその中に飛込み、たい顔のみを風に曝してヒツと堪えたり。かくて余は堪え得る限りを堪えて、今はたまら

すと飛上るや、一散に役場の中に飛込み來りぬ。何の事はなく釜烹の刑に遭ひたるばかりなり。かくても幸ひに風邪もひかざりしこそ不思議なれ。

この夕役場員小學校長等余等の爲に歓迎の宴を校長の寓舎に開く。心盡しの御馳走は酢蛸、薩摩汁、干肴なり。余は彼等が真心こめたる待遇振に満腔の謝意を表せざる事能はず。かくて呑めぬ口に泡盛を強ゐられたる頭重く、九時過る頃宿舎に引取りぬ。今宵も寒き事昨夜に異ならず。風はよすがら吹荒れたり。

七日、風なほ止まねどや、薄らぎぬ。されど今日も到底本船の迎ひに來る望なきに、九時をろよりは雨さへ降出たり。詮方なき儘に午前

は「離島めぐり」を草しぬ。今まではいづこに行てもその暇なくて、わが文約に反き居たるを、端なくも蕞爾たる一孤島の中にそを果し得るの機會を見出せしこそ奇縁なれ。

(六) 島めぐり

午後は雨止みたるに役場員等に案内されて島めぐりを試みぬ。村を西に阿旦葉繁さ下を抜て、珊瑚礁の碎けて眞白なる海岸に出れば、打上られたる貝さては濱珊瑚、菊目石等の夥だしく散敷るに目移りて暫しそを拾へる後、海岸を左に繞れば當面に斷崖あり、崖鬼としてわが頭上を壓し、岸を噛んで碎くる波、どつと寄てはわが足下を洗はんと

す。山と海と牙の如く交はり、或は開いて砂汀を現じ、或は蹙つて懸崖となる。仰いで懸崖を望めば節理整然たる岩壁相重疊し、假へば劔を併植せるが如きあり。或は板を積重ねたるが如きあり。その併植せる劔と積重ねたる板と、宛ら海面より吹まくる疾風に靡くと見えて、一樣に併行して山頂に傾斜するあれば、また吹返されて靡けるがごと、將基倒しに海面を臨んで傾斜せるあり。海には天懸吼え、怒濤珊瑚礁を衝いて十丈の波を擧る處、百尺の巖壁頭上に崩れ來る。何等の壯觀ぞや。

砂白くして山少しく退ぞき、山角左右に出で、相抱擁せるところ、こゝに一曲浦あり。貝を拾ひ倦める余は獨り高みに茂る阿旦の葉を分

け、一巨巖の磊塊たる下に出れば、地少しく廣くして芝數歩の間に繁く、巖下石上には數個の古び且つ缺たる壺を安置せり。仰げば斷崖削るが如き處蘇鐵巖角に生じ、眼前に横はる巨巖の上には一丈ばかりの榕樹生えて、八方に擴げたる真白き根のひしとばかり巖を縛し、幹は横さまに傾斜して枝振面白くその鬚根を垂れたり。さても如何なる壺にやあらん。高さはいづれも二尺ばかりにして徑は一尺に餘るべし。島人のこの巖を靈なりとして祀れるものと覺し、とばかり余は首肯ながら巖下に立寄りて壺の蓋を開き見ればこは如何に、洒れたる人骨と一個の古りたる罽體ありて、まづ余を迎へたるならずや。試みに他の壺を開き見ればこれにもまた罽體あり。數個の罽體壺は實に形勝の地

を占て苦さびたる巨巖の下に置かれたるなり。余は好奇心に驅られて巨巖の横より斜に阿旦を分け、奥の方に進み入れば岩壁の間や、高さ處に、また數個の壺を安置せるものあるを見ぬ。更に進み入る時余は断崖の凹處若くは他の錯落せる巨巖の下到る處にかゝる壺の累々たるに驚るかされぬ。

茂りに茂れる阿旦の葉は海岸と余とを隔てたり。飯匙情多き島と云へるに、缺けたる燭體壺の中にその長虫の潜み居る事もやあらん。一種の鬼氣は悚々として余を襲ひぬ。余は急ぎ足に阿旦の葉を分けて再び一行と合せり。島人に問ふまでもなし、壺の中なるは彼等が祖先の遺骨なり。余は後奇なる風習を聞きぬ。そはこの島にて死者はこれを

埋葬せずして阿旦の下に置き、風雨に暴露してその腐敗を待ち、然る後骨を壺に收めて輕便なる祖先以來の墳塋の中に合せ祭るの風にして爲にこの島には犬の飼用を禁じ居たりと。然れども去る三十五年駐在巡查より古來彼等の踏襲し來れる蠻習を改むべく説諭し、爾來埋葬の法を定めれば今日においては死體暴露の惡風を斷つに至り、同時に犬をも輸入する事となりたりといふ。左れど今日にてもこの島には犬の數極めて少なし。

(七) 美なる小珊瑚島

余等は更に幾多の巖角を廻り、遂にこの島の南に盡んとする處に出

ぬ。こゝよりは道蹙まりて海岸を歩すべからず。則ち島人の切開ける細徑を攀ぢて突兀たる岩山を上りぬ。迂回して進む事七八町にして、火山岩の分解して濃紅なる埴土をなせる頂上に出れば、かの磊鬼の巖と珊瑚礁礁とみな脚下にあり。西北の海面悉く一眸の中に收むべく真にこれ天空快濶の概あり。西には久米島を指さし、北には粟國と對し、その中間には標渺として硫黃島（鳥島）を望む。然れどもこれ等諸島の眺望はなほ甚だ奇とするに足らず。若しこれ魔術の如く直下一二海里の眼下に浮み出たる一小嶼に至つては、直ちに余を魅し去り恍惚として釘付されたる如く、そこに佇ましめぬ。あゝ何ぞ其美なるや。余は覺えず叫んで曰く、是なるかなと。見よ、島は只僅かに二十

町の周圍を有せる拳大の一塊のみ。然れども殆んど正しく圓形にこれを圍繞せる珊瑚環礁あり。その圈はまさに一里半に及びて、こゝに不斷の白波を起し居れば、蒼海の中造化の妙手腕をもて白色の圓環を描き出したるに異ならず。余は曩に慶伊島の附近を航せるの時これを高さより俯瞰する能はざるを憾としたりしが、今は慶伊島に優れる美事なる珊瑚島の模型を圖らずも眼下に見下し得たるなり。余の喜び知るべきのみ。

島はその名を入砂と呼ぶ。蒼青に冠の如くその上を飾れるは棕櫚に似て更に大なる檳榔にして、その數一萬餘を數ふべしと島長は語る島の周圍は純白の砂これに繞りて自から第一圈を描き、これを包圍せ

る海水は珊瑚礁に割されて宛然礁湖の如く、自然にまた碧瑠璃の第二
 圈をなす。而して外圍の珊瑚環礁は即ち第三圈をなせるに異ならず。
 礁湖の中處々に極めて鮮明なるエメラルドの色を呈せる處あり。これ
 水甚だ深からざるの處珊瑚礁の碎け成せる純白の底砂に映發せるな
 り。かくの如き水色は内地の近海においては全く見る能はざる美觀に
 屬す。更に渺たるこの珊瑚島内混々として清泉を湧出するところあり
 と云ふに至つては、彷彿として一個の仙島なり。

余は恍惚として島影に見とる、事多時、この島に遊ばん事を願ふの
 念禁ずると能はず。役場員曰く平日ならば刳舟もて卅分間に達すべし。
 されど海荒き日はかの干礁(環瑪)環礁を乗入らん事思ひも寄らずと。

余は切に風和らぎて彼の島に行き得るの時來らん事を思ふ。されどか
 らる日和とならば運輸丸は直ちに余等の迎に來るならん。余は遂にこ
 の島と縁なきか。

入砂に辭し、再び山道を上下しつゝ、南東を限れる山の上に出でぬ。
 光景はまた一變せり。こゝは山と云はんよりは寧ろ高原をなし、蜿蜒
 小起伏をなせる地盤には、芝滑らかに生えて莖花紫に、蘇鐵險處に
 生ぜり。南面斷崖をなして海に臨み、東の方慶良間諸島を指呼の間に
 望む。少しく足を東面に轉すれば、地は漸やく下つて好個の牧場をな
 し、こゝに牛を放牧し居るを見る。牧場を歩みてまた高きに出れば、
 麗しき緑泥片岩突兀として群起し、重疊齋縁して遙かに海に下り、ま

た突兀として蹶起し、屹然として海中に半島を現出す。

海に臨める山腹は悉く蘇鐵にして、山骨その間に露出し、無量の蕓趣様の風物、すべて目に新ならぬは無し。一行は暫らく岩影の董咲る芝生に休息せる後、更に島の北面に出で、歸るべく足を轉じ、蘇鐵生ふる谿間を傳うて次第に北海岸に下り、それより珊瑚礁を踏み砂を踏み、出發の際より約四時間を費やして再びわれ等の宿舎に歸り着きぬ。

この夕得ならぬ珍客の來させるに牛を屠りたりとて、島人より思ひかけぬ牛肉の贈物に與りぬ。煮るに砂糖こそなけれ、厚き志を何に換ふべき。そのまゝ豚の脂肪にて炙つけ、僅かに求め得たる大根と併

せ煮たる味、島めぐり後の空腹には大半の美味なり。たゞ宮城氏の情に分たれたる白米の、その人に取りてもまた貴重なるべきを思ふて、毎食七分目に遠慮し居たるこそ本意なかりき。

八日となりぬ。風なほ止まねど昨日より雲の行かひ、やゝ穏やかになれり。さはれ運輸丸は今日もなほ慶良間を出得べしとは思はれず。十時をろより河野氏を率て海岸に出で浦傳ひに貝を拾ひ歩く。巖角海に突出し行手を遮ぎるところ少なからねば、かゝる處は辛く巖を攀ぢ或は匍匐ふて降り、或は山を遠まはりす。斯て難行苦行を試みることに一再に止まらず、潮風に吹れつゝ散々に身體を動かして宿に歸れば、食慾頻りに動きて、かの本意なき憾綿々たり。試みに島人の常食なる

蘇鐵の澱粉を甘藷に摺り雜せ煮たるを取寄せ見たるが、これのみは如何なる事、一種の臭氣鼻を撲つて口には入れながらも咽喉を下す事能はざりき。されど余は甘藷の葉の汁は試みたり。但し桑の葉だけは蓋を聯想して中止しぬ。

午後風和らぎたるに、入砂に行けぬ事あるまじと、直ちに役場に赴ひきてこれを謀りたるに、役場員は危ぶみながらも、兎も角列舟漕の上手に相談すべしとて、使丁を走せたるがやがて屈強なる一人の漁夫は使丁に伴はれて來りぬ。されば彼はいふ、かの入砂の干礁まで寄せんはいと易きことなり、されど干礁には入口なければ名残の波なほ高きに漕ぎ入れん事なかくに思ひも寄らずと。余はいふばかりなき失

望を喫せるなり。

詮方なければ學校を參觀し、授業後水晶の出る山ありといへるに、その崩れ落たるを拾ふべく生徒等を案内とし、海岸の山に登り、はた谷間をあさりて多少の水晶を獲來りぬ。

風は次第に風ぎ來れり。明日の朝こそ迎ひの船來るならん。余は遺憾なく渡名喜島における余の生活を語れり。さらばわが筆もこれを限りて渡名喜島と訣るべきか、否、掉尾の一振として最後に書記すべき事こそあれ。そはわが始めて試みたる豚小舎に於る奇なる經驗なり。

(八) 豚小舎に於る經驗

少しく琉球の事情に通ぜざるものは豚小舎と云へば直ちに琉球人の便所なる事を合點せらるべし。余は琉球にある事既に三十日にあまりたれど、未だこれに上るの機會に接せざりしなり。否機會は屢々ありたれども、これを敢てするの勇氣なかりしなり。されど今は是非ともこれを試みるか、左なくば態々役場まで出頭せねばならぬ境遇にあり。そは普通の便所を有するは只役場あるのみなればなり。三思の後分別は定まりぬ。われは寧ろその近さを擇ばん哉。

船にて惱まされたる故か着たる翌日は終日秘結し、その翌日もまた秘結し居りぬ。事は此日に係る。乃ち疏通の道を開かんと勇を鼓して豚小舎に赴む。裏に廻りて見れば思ひも設けぬ立派なるものにて

その構造は本島到る處に見るものと異ならねど、頗る清潔にして外見の如何にも堂々たる、たしかに一家の貴重なる財産たる事を示せり。余は沖繩の代表的便所として少しくその構造を記すべし。

間口三間奥行二間半許り、悉く石疊として三部に區劃し、更にその奥にアーチ形に疊みあげたる天井ありて、その下を豚の寢所となせり。この一區劃毎に三四頭の豚ありて或は眠り或は徨ふ。その前方高さ凡そ二尺の石垣をもて仕切れる此方は即ち便所にして、豚の生活し居る位置よりは稍高くその中央のところ仕切の石垣に接して丁字形をなし幅僅かに四寸長さ一尺五寸許に穿てる穴あり。石垣の下より豚小舎と相通ず。この穴の周圍舳形に石を箱こみたるるところ即ち踏石にして、

これやがて用を便するの處なり。毎區劃これを有せるは三人同時にここに割據し得る事を示す。三個の便所はまたおの／＼袖石をもて隔たり。而して直下の穴と豚小舎と通せるところや、凹みをなし、豚はその頭部をこゝに挿入して、踏石の下なる穴にその鼻の半を出す事を得べし。

余の踏石に上るや、忽ち股下に起る疾風の如き鼻息を聞き、同時に半ば穴より擡げられたる豚の鼻を見たり。熟ら先生の位置を考ふるに假令鼻を上て頻りに唇を舐らんとするも、石に隔てられたれば、たい空しく天より牡丹餅の下るを待たざるべからず。われの秘結せるに當つて彼の辛氣を察すべし。鼻息のいよ／＼荒きを聞きて、余は興ざり

つ、秘結更に秘結を加ふるの感あり。されど一たび淵に臨んで案外度胸は据れり。用事のなき香氣には、呑もせぬ巻煙草を點來れるを悠々とふかし始めぬ。豚には氣の毒なれども詮方なし。

見渡せば豚小舎と相隣つて牛小舎あり。牛小舎と相隣れる納屋の壁に春に充せる青草の吊しあるを見て、余は昨日山よりそを薙取りて頭に戴だき來れる此家の娘を想ひぬ。かくて余は更に牛小舎に視線を轉ずる時、忽ち奇なる發見をなせり。

そは小舎を離れ居る牛の背に鳥の止り居たる一事なり。余は不可解の眞理を發明し得たるかの如くに、われを忘れて喜びつゝ、猶寢たる牛の方を見れば、こゝにはその鼻の先に鶏と雛兒とありて宛から牛と共

に戯たはむれ居まるもの、如ごときを見ぬ。あゝ何等なんらの平和へいなる而しかしてまた香のん氣きなる現象げんぞ。牛うしや鳥からすや鶏どりや、而しかして卷煙草シガレットを豚小舎ぶたごやに燻くわらせる木鐸はくたくん君くんや、共ともに俱ともに葛天氏かつてんしの民たみに化くせるを見ずや。
暫しばくにして鳥からすは去されり。豚ぶたの鼻息はないきます〜急きうにして余よは遂ついにに堪たゆへくもあらず。咄ぶつこの醜漢しうかんと叫まんで突つと廁かばやを出いでぬ。余よの豚小舎ぶたごやの記き了りる。

八日かの夜よは甚はなはだ静せい穩えんなりき。

（以上渡名喜島にて記す）

久米島

（一）島影の壯美

九日かの拂曉ふつぎょう沖おきの方かたに當あたりて汽笛きてきの聲こゑ聞きゆ。明あきかに余等よらを迎むかふべく運えん輸丸ゆまるの來きたれるなり。驟ひつ起きして食しょく事じを認しため、五時ごじ半はん島人しまびとに別わかれ、短艇ゴートに乘のり移うつれば、干礁ひげの上うへ波なみ静しづにして、三十分さんぷんの後のち早はやく既すでに本船ほんせんの上うへに運えんば、六時ろくじ十分しふぶんといふに錨いかりは揚あげられぬ。

久米島くめじまは渡名喜わたなぎを去さる事こと西にしに二十四海にじゅうよっかい里り、那霸港なはこうを距とる事こと五十海ごじゅうかい里りに當あたり、島しまの周しゅう圍ゐは十一里じゅういちり二十四丁にじゅうよっぢよう餘よ、二個ふたごの間切まぎりと十九個じゅうこの村落そんらくより成なり、全島ぜんとうの戸數こすう千八百四十せんぱちひゃくしじゅうよ、人口じんこう九千五百三十六きゅうせんごひゃくさんじゅうろくを有あせる、沖繩しゅんげつ

群島最西の一大島なり。

今日は海上に多少の餘波こそあれ、數日來と打つて異なる風日和なれば、船はさしたる動搖もなく、余は望遠鏡を手にして、長閑に甲板上の人となるを得たり。兎角する中に久米島の淡き影は次第に濃く、樹色山容徐々に展開し、沿岸の凄まじき絶壁をなし居る様さへ鮮かに現はれ來り、自からまた粟國渡名喜の諸島と異なる峭拔の觀を呈せるを見る。やがて島尻の南端に近づけば鏡裏に入來る光景いよ／＼凡ならず。海中に屹立せる懸崖は垂直線に削り下たる如く、その高實に數百尺に及ぶべく、亭々たる檳榔螺髻の如く其上に叢生し、雄偉の影、壯絶の觀、眞に内地のものにあらざるを思はしむ。余が恍惚たる中に

島影は次第に轉じ、懸崖も徐々に陵夷し、やがて九時四十分と云へるに、われ等の船は珊瑚堡礁の開けたる間より儀間の港に入りぬ。

余は便宜上河野氏と共に取敢ず警察署に赴きぬ。こゝにて訪れ來れる具志川間切長儀間小學校長等と會し、携へ來れる食品を調理せしめて畫餉を取り、食後直ちに人夫を雇ふて寢具食品を荷はしめ、結束して島めぐりにと出立つ。運輸丸は今日の夕刻出帆の筈なりしを、余より交渉してこれを延期し、明日一日間碇泊せしむる事としたるものなれば、余はその間に出來得る限り島内を視察せんと急げるなり。警察署よりは特に巡查部長を余等の嚮導となし呉たり。

今夜の宿を仲里間切役場と定めて儀間村を出たるは十二時半なり。

儀間は仲里間切に屬し、戸數百八十五、人口八百七十八を有する此島第一の部落なり。全島火山岩より成れども山骨の露出せるところ少なく儀間附近の低地は沖積層より成れり。家屋の周圍は他の琉球諸島及び渡名喜島とも趣を異にしすべて石垣を設けず、また堤を築かず、ただ平面上に生垣を構ふるのみ。儀間村にて余等の通過し來れるところは重に月橋樹の生垣のみなり。月橋樹は薑香科に屬する植物にして印材に適し、琉球婦人の梳櫛はまたこれより作る。五月花開く時は、籬に時ならぬ白雪を現じ、得ならぬ香氣馥郁として行人の衣に薰ずるといふ。瓦葺は渡名喜島ほど多からず、また清潔の度も下れども、本島に比すれば寧ろ遙かに優れり。要するに琉球諸島中に於る最も清潔な

る土地の一ならん。道にて行あふ婦人小兒等の服装さへ比較的に瀟洒たるが多し。こは本島の片田舎には見るべくもあらぬところなり。家に機杼の聲起れるは久米島紬（即ち本場琉球紬）を織れるなり。

(二二) 福樹の村

儀間と仲里間切役場の所在地たる眞謝村との間には約一里に及ぶ二間幅の美事なる新道路あり。久米島は沖繩屬島中の最も肥沃なる地にして、原野あり、森林あり、水田あり。山には松、椎等の雜木叢生して鬱々の觀を呈し、野には雜草肥え太りて人の來り耕やすを待てり。水田に牛を追うて田植の準備に急がしきもあれば、屋後に鐵車牽く

馬に鞭ちて砂糖を製せるもあり。今久米島は田植と製糖のために最も多忙を極め居るの時なり。琉球諸島は何處もみな製糖の時季に入り居れど、田植に至りては到る處甚だしき差違あり。本島那覇附近の如きは二月初旬既に植付を終り、八重山地方は凡そ三旬を遅れてその節に入り、久米島渡名喜島等にては三月上旬漸やく田ならしにかゝりつゝあるなり。蓋し斯の如き差違を來せるは内地の如く、其播種又は植付に必らずしも一定の時季を要せざればなるべし。

途次謝名堂の小學校に過り、凡そ二里を歩みて宇根村に入れば、こゝより六七町の間眞謝村と相連接して、約二間幅の道路の兩側は、すべて見上るばかりの福樹もて、隙間もなきまで美事なる壁障を作れり。

こは皆人家の生垣として密植せられたるものにして、その高さ多く三丈に及び亭々として併列せる様目も覺るばかりの美觀なり。福樹は由來印度半島の西部に自生する常緑木にして琉球にはその始め移植されたるものなるべきも、今日にては自生植物の觀をなせるまで到る處に野生せるを見る。その材質の堅緻なるを以て沖繩における良材の一に數へらるゝものなるが、其樹容また頗る美にして恰も帯を樹てたるが如く、巨幹中央に直立し、其根部より密接して多肉の枝條を射出し、小判形をなせる長さ五六寸の厚くして且固き葉は四時美はしき光澤を帯び、隙間もなくこの枝條に密生せるなり。されば琉球の如き風害多き地方には、防風樹としてその効果極めて多く、またその葉は火災に

遭ふも容易に萎縮せず且隙間もなく枝梢に密生するが故に、防火の効もまた多大なり。沖繩人が好んでこの樹を家の四圍に植るもの決して偶然にあらずといふべし。されば琉球の地往くところとして福樹を見るざるなきも、たゞかくの如き美事なる福樹の列に至つては蓋し他に見るを得ざる處なり。思ふにこの生垣をしてかゝる偉觀を呈せしめたるには、少なくとも數十年或は百年の日子を要したるならん。

余は恍惚として福樹を仰ぎつゝ歩を進むる中四百坪ほどの宅地の四圍に悉く福樹を植込み、これを二丈半程の高さに美事なる蒔込をなせるものあるを見て思はず立止り、その目ざましさに驚ろきつゝ、宅地の中に踏込み見たり。幹はいづれも一抱に餘るべく、一面に苦むした

る様たしかに百數十年のものなるをよくもかくは蒔込たるよ。聞けば祖先以來この蒔込をなし來れるなりといふ。まことに一朝一夕の苦心にはあらずりけり。余はこの家の庭園にて唐辛の柵を見たり。この唐辛幹の高さ一丈二三尺、上に柵を作りて枝を横はらしめたるが凡そ一坪の間に隙もなく葉を延べ小條を張り、累累として實を結び居りぬ。

福樹の村外れ、大なる古把提斯樹立る處を右折すれば仲里間切役場なり。琉球第一の間切役場と稱せらるゝに違はず、四百坪に餘る四周を高さ一丈幅三尺の城壁にも紛ふべき美事なる石垣もて繞らしたるを見る。こは乾隆年間清の冊封使琉球に來るの途次船難破して久米島に漂着し、新に造船工事を營むに際して、冊使の宿舎に宛るため俄

かに工を起してかくの如き壯麗の外廓を築きたるなりといふ。廓内屋舎を圍めるの福樹はまた悉く巨大のもの、老幹苔蒸して太さいづれも園二に及べり。

この夜は役場内に宿泊する事と定め、一室内に陣取たるが、河野氏と巡查部長とは小使を相手に携へ來れる鶏を割き、或は大根を引拔來りて調理などす。その中に風呂湧きたりとの注進に、行きて見れば渡名喜の吹さらしなるとは異なり、立派なる湯殿の設あるに安心し、思ふまゝ、數日來の垢を落したる心地いふばかりなし。

この夕十五夜なれば月の明さに福樹繁き村内を逍遙す。直なる梢見上るばかり道を袂さめるに、月小さくかゝり、燈火家々より漏れて、

魔々に蛇味線の緩き音す。何となく忘れ難き印象をわが腦に止めたり。

(三三) 古城の風光——神仙の通路

翌る十日、今日は儀間の學校に母の會ありといふに、是非とも間に合はず約束なれば、河野氏等は朝五時より起きて食事の用意に取かゝる。六時半われ等は食事を終り、七時間切長の案内にて眞謝村を出立つ。今日の主なる目的は宇江城の古城趾に上らんことなり。余は始め眞謝に來らば久米島の著名なる二個の瀑布と斷崖とを見ん事を欲したるも、宇江城とその方向を異にせるため、止むなくそを斷念せざるを得ざりしなり。瀑布はこゝを西北に去る阿嘉村にあり、高さ各七十尺

海岸の斷崖に懸り、海上より吹捲る疾風に煽られ、その悉く落盡すに及ばずして途中に飛散し去るといふを以て阿嘉の掛水の名あり。而してこの邊より連接せる一帶の海岸は、地這りのためにその斷層を表はしたるものならんと想像さるる、六百尺の石灰岩壁より成り、介殼の破片より構成されたるその斷面を暴露して海に臨める様崇高美の極にして、非常の偉觀なりといふ。この偉觀を目撃するを得ざりしは、余に取つてまた實に非常の遺憾なりし事を附記せざるべからず。

圓礫層より成る山間の細路を辿り行けば、眞謝の山越林深きところ大なる池あり。これは古昔深き谿を堰て築けるなりといへるが、方三町ばかりにしてその深さ測るべからず。七八寸の鮎無數にして、一尺ま

はりの大鰻すら珍らしからずといふ。それよりわれ等は山道を上下する事二里あまり。この間到的ところには籐籠の聲繁く、バサ／＼と音して飛立つ鳩應接に違なきほどなり。

漸やくにして宇江城(又堂城)の下に着く。こゝも既に海拔六七百尺の上ながら、城はなほ遙かに斷崖三四百尺の上に立てり。古城下の一農家に具志川間切長は役場員を従へて余等を待受居りぬ。かくて一行はすべて六人となり、相共に城趾を目がけて登る。コバの若木茂り、水杉、谷わたり、羊齒等の隠花植物蔓こり、椎松等の雜樹階々まで生ふる中に自然石の磴道通せるを、われ等は踏みて上れるなり。これを暫くにして城趾の處に出ぬ。苔蒸したる斷礎朽壁處々に存し、凡そ五

六百坪の廣さはあるべし。すべて荒烟蔓草の鎖すところとなりて、た
た莖紫に、蒲公英に似たる花黄に、琉璃紫斐紺碧瑠璃の如き可憐の花
をつけ居るを見るのみ。

物見と覺しく、斷崖の上更に珊瑚岩もて築き、薛荔の鎖せる最も高
き壘上、海拔一千尺の上に入れは立ちて四邊を見渡しぬ。この瞬間に
忽ち長く忘るゝ能はざるの光景に接したり。久米全島は宛がら魔術者
の手によつて盛められたるが如く、すべてたゞ一眸の中であり。久米
島を包圍し、併せて粟粒の如き余を包圍せる蒼海の、浩々茫々として
如何に偉大の觀を呈せるよ。儀間灣に泛ぶわが運輸丸の兒童の弄べる
笹舟より小なるを見ずや。慶良間、粟國、渡名喜の諸島は只これ瑠璃

盤上の盈石に過ぎるなり。然れどもこの偉觀に畫龍點睛の趣を加ふる
ものは島の東端楚南岬より屈起して、長蛇の如く海中に斗出せる尾神
礁なりとす。

礁はその幅二三十間にして礁面坦々砥の如く、慶良間渡名喜の間を
指さし、美事なる弧線を描く事實に四溟、蓋し天下の奇觀にして、丹
後の天の橋立の如きこれに比すれば眞に兒戯のみ。島民が古來崇拜し
て神仙の通路となすもの偶然にあらざるなり。而してこれ實に地質學
上の所謂珊瑚堡礁にして、細微動物の營むところなるを知らば、人類
の營めるピラミッド、スフィンクスの類のまた實に兒戯たるを感せず
んばあらざるなり。

城址の中には五六の雜樹あり。九年母花開きて異香を放つ。遠いさ一坪程にしてや、平面をなし、宛がら井戸の蓋とも思はる、自然石の埋もるゝあり。古昔この下に黄金を埋めたりとの口碑あり。屢々首里那覇等より來りて發掘を試みるものありとは、いづこも同じ慾の世の中なり。

古城の風景を叙したる余は、こゝにまた古城の歴史を語らんか。遺老傳に録して曰く、往昔久米島に仲城按司あり。城を築きてこれに居る。偶々中山大兵を發して久米島を攻め宇江城を圍む。按司險を恃んで降らず。官軍その陥るべからざるを知つて、轉じて按司の弟が築ける具志川城を攻め遂にこれを陥る。仲城按司これを聞いて大いに驚き、

一幼兒を堂の比屋なるものに托し、己は山嶽の中に遁逃してその行くところを知らず。城竟に亡びぬ。堂の比屋幼兒を養ひまさに父業を繼しめんとす。後中山王按司の遺孤をして城主たらしめんとするに當つて、比屋俄かに異心を藏し、幼兒を招いて偽つて結鬚の狀をなし、機に乗じてこれを刎ね、病のため卒すとなして、弒逆の惡名を避く。こゝにおいて比屋中山に入勤し、乞ふて久米島の城主と爲る。既にして郷に歸るの時衆人眞謝津に出で、比屋を迎接す。比屋權を恃んで答禮甚だ疎なり。たゞく鞭を汗馬に加へ城門に入らんとする時、馬蹶きて倒れ、比屋馬より落ちその帶ぶる所の刀に刺れて死す。後人乃ち別に按司の靈を祀るといふ。これ遺老傳の語るところなり。その何れ

の世なるを知らずと雖も蓋し元龜天正以前なりん。
 堂の比屋は一個の逆臣のみ。然れども久米島細の織方を傳へたるものは彼なりといふ。彼また天文に長じ、その傳ふるところの規箴といふもの今に存せり。果して然らば利用厚生の道において彼の功はまた没すべからざるを見る。

(四) 鳥島の紀念村

暫らく古城の上を徘徊せる後、余等は途を東南に取りて城を下り、推倒れ松倒れ、自然に腐朽して道を遮ぎれる林間の樵徑を傳ひ、漸やく山を降り盡して仲村渠、仲地等の諸村を過ぎ、或は某の家の駒の角

或は君南風(祝雲井)の曲玉等を見、かくて西銘村に出で全島第一の舊家たる上江洲某の宅を過り、遂に南海岸に出で略久米島を一周し、最後に鳥島の移住地を訪ひぬ。

鳥島は久米島の北約二十海里に當り、硫黄を産出しつゝある一小火山島にして、土地礫确、薪水食料に乏しく、加ふるに頻年鳴動絶えず、また屢變災あり、政府より幾回か救助をなし來りしが、去三十五年の如き、鳴動最も甚しきを加へ盛に黒煙を噴出して、全島の破裂宛ら目前に迫れるの光景を呈するに至り、當時内務省よりは技師を派遣し調査せしめしが、沖繩縣廳にては之を機とし、斷然島民の永住を許さざる事とし、土地肥沃にして薪水の豊なる久米島に移住せしむるの方策

を取り、翌三十六年國庫より一萬七千餘圓の支給を受け、久米島々民また土地を義捐し、遂に三十七年を以て具志川間切仲泊の地に全島民百戸を移住せしめ了りたるなり。

この新移住村の一端に煉瓦作りれんがづくりの小倉庫せうそうこめきたるもの立るは、これ島民が祖先の遺骨を合祀せるの處にして、又之と並び、塗籠ぬりかごたる祠立ほこらたてるは、島内の神として尊信されつゝありたる七嶽の土を七箇の壺に採收し來り奉安せるものなり。當初島民は一島絶滅するも祖先の地を去るを欲せずとて、容易に移住を肯んせざりしも、その遺骨を移し、更にこの七嶽の土を移し祀るに及んで始めて快よく故土を離るゝに至りたるなりといふ。余は好奇心に驅られ、請ふてこの七嶽神の籠中を伺

へば、丈一尺ばかりなる七箇の壺ありて、壺の蓋には各嶽の名を漆にて焼つけあるを見ぬ。なほ七箇の壺を排列せる背後には、恰も抹茶ちやまや碗の大きさの古土器數十を積重ねありたるが、これみな各嶽の地下八九尺の下より掘り出したるものなりといふ。取りてこれを叩くに金屬の音を發するものあり。余はこの二箇を分與せられて、記念のために持歸れり。

かくて余等は鳥島村を辭し、再び磯間に歸り着て、母の會に連なるべく高等小學校に赴おもむきたるは三時を過る三十分の後なりき。

（五）母の會と輕便の宴會

余は琉球において母の會を見んが如きは、非常に意外とするところなるを告白す。現んや久米島の母の會が内地に見る母の會と性質を異にし、殊に最も琉球の地に適切なるものあるにおいてをや。余はこの會の如きまさに大いに吾人の琉球に學ぶべきものゝ一なるを信じて疑はず。

久米島の母の會は小學兒童の母親を會し、眼前の事例によつて、教育の何ものなるかを、容易に無學なる彼等に解せしめんとするものなり。一言にして云へば兒童の母親に對する實物教授なり。余は久米島の母親がこの會に出席するを大いなる樂しみとなせるの狀を見て、現に此日の如き繁農季節に屬するにも拘はらず、二百五十餘名の來會者あり。

りたるを見て、一にこの會の成果を思はざるを得ざりき。簡樸質素を事とせる彼等に在つては何等の虚榮なくまた何等の外見あるなし。彼等が機杼を抛つて來り會するもの、その形式的にあらざるや知るべし。乞う余をして會の一般を語らしめよ。此日は校舎の狹隘なるため尋常高等の女生をのみ席に列せしめたり。その數約二百來賓を合はして五百名の人を一堂に會したるなり。會の順序は概略左の如し。

- 一、校長開會の辭（教育の必要、家庭と學校、母親の任務）
- 二、君が代の唱歌（兒童合唱）
- 三、勅語捧讀
- 四、作法數種（生徒數名）

- 五、日本地圖、修身掛圖等の説明（教師）
 - 六、算術實地教授
 - 七、讀方、書方、話方（生徒數名）
 - 八、唱歌、遊戲數種（生徒多數）
 - 九、繪畫、理科實驗
 - 十、裁縫、手工、料理法等
- 更にこれを説明せん。今君が代の唱歌を合唱し、勅語を捧讀するに當つては、君が代の歌旨を琉球語にて説明し、同時に琉球歌なる「石などの石の大巖なるまでん、うかけぶせみしよりわが御主加那志」

と同一意味なる事を告げ、勅語はわが國民の守るべき道を天皇陛下の示し給へるものなるを知らしめ、また作法として女生數名をして茶菓煙草盆等を來賓の前に出さしめては、家庭における作法の必要を説き讀方の如き書方の如き、一々生徒をしてこれを試みしめ、話方はまた内地語をもて一場の對話をなさしめ、かくて内地語の必要を説き、家庭にありても内地語を推奨せざるべからざるの注意を與へ、算術はまた彼等が日常その要を感せる適切の例によつて、その解釋を與へ、その他繪畫の如き手工の如き裁縫の如き料理の如き、みな眼前にこれを試みしめて、來り會せる多數の母親をしてその愛兒が如何に教へ導かれつゝあるかを會得し、而して學校がかくの如く懇切の教授を垂るゝ

もの、これ一に天皇陛下の大御心に出るものなる事を、深く彼等の單純なる腦裏に印象せしむ。

一場の光景實に余に甚深の感動を與へたり。内地語をもてせる女生等の對話の巧みならず、その言葉の純然たる東京語にして訛音を混せざるを聞いて、琉球少女の特有なる美はしき聲をもて聲の限り合唱する春の遊び、浦島太郎等の唱歌を聞いて、はた行進歌を唱へつゝ活潑に各種の遊戯を演せるを見て、余は實に何とは知らず、涙ぐみ來るを禁ずる能はざりしなり。言語風俗を殊にする南陔の僻島に來りて、かくの如き光景に接せんとは誰か思ひ設くるものあるべき。

聞く母の會は校長外間氏の主催にかゝり、久米島々民の誠實なる援

助により、昨年その第一會を開けるを始めとし、爾來久米島の母親が、熱心に今日の第二會を待設けつゝありたるものなりと。世に家庭と學校の連絡を説くもの多しと雖も、その實効を擧ぐるにおいて久米島のこの會の右に出るもの、蓋しこれあるを知らざるなり。余は校長と島民の希望によりてこゝに彼等母親のために一場の蕪雜なる演説を試み、併せて余の紀念として校庭に一本の榕樹を植べきを強られたるを光榮とせざるべからず。

母の會は四時を以て終り、余は別室において女生の手製になれる料理を、女生の給仕によりて饗應せられぬ。

三十分の後、母の會の會場は新たに裝飾せられて余のための歓迎會

場となれり。會するもの間切議員、役場吏員、醫師、學校教員、警察官吏、郵便局員、商人等すべて七十餘名、久米島の中心點となれる各種の人を一堂に網羅したるなり。こゝに志賀矧川君の所謂輕便なる宴會は和氣霽々の中に開かれたり。各自に持寄れる料理は各自の卓上に案排されつ。余の卓前にもまた芭蕉の葉に盛られて、堆きまで分配されたり。天麩羅あり、卵子焼あり、蒲鉾あり、煮肴あり、豚肉あり、鶏肉あり、琉球特産の田芋の煮ころばしあり、南洋の珍菓萬壽樹の實の膾あり。島民が心盡しになれる山海の珍味の、余の前に致されたるを見ずや。

悉くこれ琉球婦人の手ずさみになるもの、よし香ひところの酒に甘

露の味なく、食ふところの食に大半の美なしとするも、脂粉驕奢の氣紛々たる内地の宴會に比して如何に無量の趣味を含蓄せりとするぞ。而してまた如何に天真の情致を發揮せりとするぞ。かくの如くにして一夕の會合よく十年の情を温ため得べきなり。吾人の琉球に學ぶべきもの一に何ぞ多き。

余は席にある事凡そ二時間、無限の快感を覺えて、會場を辭したるは暮色まさに蒼然たらんとするの頃なりき。

(六) 南陔の樂天地

久米島は琉球群島中において、生活の極めて安易なる樂天地なり。

蓋し久米島の美風はその樂天地なるがために生ず。而してその弊もまた實にこれがために生じつゝあり。余はこゝに久米島の美を語ると共にまたその弊を併せ記さざるべからず。

久米島の母の會あるを記せるものは、蓋し小學教育の遺憾なく普及し居るべきを聯想せるならん。然り、初等教育は實に遺憾なく普及しつゝあり。儀間における尋常高等併置校には四百二十七人の兒童を收容し、就學歩合は九十八に上れり。他に具志川、仲里等の諸校及び分教場にすべて九百の兒童を收容し、かくて就學歩合の平均は實に九十六に達す。聞く、一二月月の不足を以て學齡に達せざるの兒童は、その母親より無理に就學を乞ひ來るもの少なからずと。

各村にはみな青年會あり。余は久米島の巡回中、これ等青年會場に宛られたる特殊の家屋二三を見たり。重に學校教員その主任となり毎夜青年を會して内地話と簡單なる課目とを教へ、農業談、風俗改良談等を試み、その實効を擧ん事を期するものにして、沖繩各地その設ありと雖も、久米島の如く着實の歩武を以て進みつゝあるものは尠なしと云ふ。

全島民の團結になれる共益會なるものあり。これ教育、勸業、衛生、經濟、風俗等について、久米島の利益幸福を増進するを以て目的として設立せるものにして、毎年四回會合を催はしつゝあり。内地に屢々見る有名無實の團體と異なり、團結の鞏固にして誠實なる全島の社會制

裁は一にこの團體の司どるところとなれるが如き感ありといふ。これを警察署に就て聞く、久米島の警察事務は極めて閑散にして、まゝ山林盜伐、多少の賭博犯等を出すに過ぎざるのみ。而もその犯罪者も土着の島民には少なくして寄留人に多しと。

風俗の敦厚なること概ね斯の如し。衣食足つて禮節を知るといふもの、われ粟國を見、渡名喜を見、久米島を見來つて始めてその眞なるを知る。久米島が沖繩屬島中最も肥沃の地に屬せる事は既にこれを説けり。久米島々民は實に多大なる天恵の下に生活せり。沖繩諸島中季候の最も緩和せられたるの地は久米島なり。水は到る處に湧き、山には隨處に薪あり、藷や、甘蔗や、米や、粟や、みな何等の肥料を施さ

ずして多くの收穫を得べく、而も未だ耕作せざるの土地はなほ餘りあり。魚は近海に最も多く棲息し、久米島は實に有名の漁業場たり。この島の季候は最も養蠶に適して一年三回これを養ふを得べく、また黒潮の鹽分は極めて豊富なるが故に、海岸の干礁には日和績の際において、自然に結晶せる多量の食鹽を得べし。日常生活の必需品は悉く島内に辨せざるなく、久米島々民は實に勞せずして安らかに生活を営み得るなり。これをかの粟國の如きに比してその差果して如何ぞや。然れども安逸にその生を送り得る事は人類を向上せしむる所以にあらず。勞せずしてその食を得る久米島々民が懶惰その性をなせるもの豈偶然ならんや。農民が勞働する平均時間は一日僅かに二時間前後の

み。多きも三時間を出でず。他は家にあつて煙草を吹し、若くは蛇味線を弾き、若くは茶を呑み、若くは泡盛を強飲するのみ。交通の便次第に開け、琉球諸島の事情よく紹介され、内地人の久米島に出稼するもの、多きを加ふるが如きあるの際、彼等はよくその生存競争に堪ゆるを得るや否や。これ余の寒心せざる能はざるところなり。余が母の會において熱心に彼等の注意を喚起し置きたるは實にこの點なりき。

久米島紬 即ち琉球紬はその廉價なると地質の強堅を以て古來有名のものなり。如何なる家と雖も機を具へざるなく、かくて久米島全島の婦人は終歲紬を織りて營々たり。今全島の婦女約四千七百人中老幼

を除き假にその五分の一が機械に従事せりとするも、毎日九百五十人の織子は機にかゝり居る割合なり。而も一ヶ年の産額僅かに三千反を出ざるを見る時は、その名の徒らに高く織子の徒らに多くして、産額の驚ろくべき過少なるに一驚を喫せざる事能はざるべし。そのかくの如きものまた一に婦人の懶惰なると、その織方の文明的ならざるに依るのみ。

久米島の婦人は男子に比してよく勞働す。然れどもその機械に費やす時間は一日僅かに五時間を出ず。他はその嗜むところの茶を啜り、空々として餘日を送る。且つその機は毫も改良を加へざる古來のものにして、その紋様も一定し、これ以外に出る事能はず。一反の紬を織

るに早きものにして一ヶ月、遅きは五六十日を要す。その原料の眞綿はすべて内地より輸入せるものにして、自家自から紡ぎ自から染てこれを織出せるなり。今一反に要する原料の價格を二圓四十錢とし、染代を二十錢と見積り、これに一反の税金二十五錢を加ふる時は資本に要するもの既に二圓九十五錢なり。織上り反布を時價の四圓五十錢とせば、その利益として得る處一圓六十五錢のみ。これを四十日に割當る時は一日の收得僅かに四錢強なり。然れども琉球にありて一日四五錢の收入を得る事は決して容易の事にあらず。四錢の値を以て彼等の常食たる甘藷に換へんか。實にその一貫二百八十目（昨年三月時價）を得べし。この甘藷以て一日三口に供するに足れり。久米島婦人の懶

惰なるもこゝにあり。琉球紬の進歩せざるもこゝにあり。而してその廉價なるもまた實にこゝにあり。然れども近時織布を以て養蠶に換ふるもの漸く多く、爲に紬の産額を減少するの傾向を生せりといふ。余は最後に美なる久米島の一舊風を録してこの稿を結ばん。久米島にては古來田の植付をなしてより、その收穫を終るまでは一切の歌舞音曲を停止せるを例とせり。別に規約の存するものあるにあらねど、島民は一にこれに違ふものなし。嘗て那覇に住せる内地人二あり。一は久米島に至りて料理店を營み、一は芝居を興行したり。久米島の事情を知れる内地の人これを見て曰く、目下田植を終りて久米島人は謹慎の季節に入れり。兩々成功するが如き事あらば久米島の天地に大變

化を來さんと。果して料理店は十日にして廢業し、芝居は二日目に停
 止して這々引揚歸れりと。島民の古樸なるすべて斯の如きものあり。
 余は彼等が爾後勤勉の風を生せんと共に、美なる習俗の長く保存され
 んことを希望して止まざるなり。

海上の遭難

(一) 凄惨なる船出

十一日、夜來風雨の聲あり。余は運輸丸の出帆延期を豫想しつゝ、春眠を貪ぼり居たるに、曉忽ち耳を劈く汽笛の聲に夢破られぬ。がはと起出見れば雨は小降となり居たれど、風は尙吹荒れていつ止むべしとも見えぬ。この天候に船を出さんは亂暴なりと、警察署より船の取扱所に掛合はしたるも要領を得ず。そは那覇を出て三日目に歸着すべき船の、今日既に七日目となれる事とて、船員等の歸心矢の如く、余のため昨日一日を空に滞在したるさへ堪へ難かりしを、今日は如何なる

冒險をなしても那覇に歸らん覺悟と覺し。

河野氏は既に東道の役目を果したれば、今度は一便を後れて役場の用事を済すべしとて、島に止まる事となり、警察署長池口氏が本島に署用ありとて余と同行する事となれり。かくてそこへに食事を認め縣廳より借來れる蚊帳と毛布とをば防水布に包み、余自身もまた防水外套に包まれ、署長と共に人々に送られて海岸に出ぬ。此時客と貨物とを乗せて既に海岸を離れたる大いなる傳馬船あり。余等の乗るべき傳馬にはなほ頻りに貨物を積入れつゝあり。かゝる間に雨はまた沖の方も見え分ぬまでに降來りぬ。

貨物の外に四十人ばかりの旅客おのゝその手荷物を携へて乗込み

たれば大いなる傳馬の中も宛がら鮮を詰たるやうなり。船は兎角して岸を離れぬ。行手を見れば、運輸丸を抱いて一涇の沖に自然の突堤を築ける珊瑚堡礁に、山の如き白波競ひかゝれり。わが運輸丸は如何にしてこの怒濤を排し、堡礁の外に出んとするぞ。傳馬は岸を離れながら沖より吹つくる風強くして、六人の舟子必死と漕げども牛の歩みほども進まず。岸を離れて、十分ばかりにして熱帶的特性を帯たる瀑の如き雨は凄まじき勢をもて降來りぬ。雨は風と戦ひ、風は波と戦ひ、この傳馬を犠牲にせんとばかり、雨と風と波と一齊に船を襲へる様の如何に物凄かりしよ。

余は面を向くべき様もなく、風に反きて俯むき居たり。わが防水

衣を流れ下る雨水また深の如し。余は船中の様の憐れむべき事斯の如きを見たる事なし。われに隣れる一人の老婆は今日の肌寒さに綿入を纏ひ居たるが、雨は肌まで通りて蒼白に打震ひ居り、わが前なる婦人は背に赤兒を負ひ、兒の頭ぐるみ己が着衣を着せかけ居たるが、宛ら水を浴たる如くなりて、濡れたる衣は兒の肌にあたり付居たり。降しきる雨水と打かゝる潮とのために傳馬の中は深さまた余の靴を没するほどの浸水とはなれり、二十分ばかりを過たるころ、余は本船に近づけりやと頭を擧げて沖の方を見やりたるに、何事ぞ、運輸丸はなほ十町の沖にあり、船は岸を離れて未だ二町を出ざるなり。如何に風力の甚だしかりしを思ひ見よ。

大いなる傳馬も、右に左に怒濤のために弄ばれて、屈強なる六人の舟子力を協せながら、如何ともせんやうなし。兎角する間に波はいよ／＼高まり來りて、どつと寄せたる一うねりの大波はしたゝかに船側より打入り、船體は同時に三十度ばかり傾斜したり。危険は目前に迫り來りぬ。人々は聲を合はして船を返せと呼はり始めたり。されど危険はわが船のみならず。先に出たる傳馬の本船に若得で遙かに押流され行くが、あはや珊瑚礁に當つて碎けんと、岸には島人右往左往に亂れ、二隻の刳舟を岸に引卸し、屈強の漢子十名ばかりこれに分乘してその救助にと漕出したり。

かゝる光景はわが傳馬の運命をも定めぬ。今はと舟子等は僅かに船

を轉じて岸の方に向直したるなり。余の傳馬が僅に二町を進み出たるのみにて、遂に列舟の救助を要せざりしは眞に至幸とせざるべからず。兎角して傳馬は岸につきぬ。かくて余等は今日の出帆の事實上中止されたるを祝しつゝ、濡れたる包を携へて宿舎に歸り來れり。包を解き見れば防水布に包みたるものながら、水の中につき居たる上を深の如き雨に打たれ、打込ひ潮に洗はれたる事とて、蚊帳の如きはびしよぬれとなり、爲めに白毛布を蒼青に染め成し居たり。

離島の海何ぞ余のために禍するの大なる。然れどもこれたゞ序幕のみ。危難と掛念の長き幕は更にこれより開かれんとす。

(二二) 何等の冒險

余は宿舎に歸るや、河野氏よりの借衣に服装を改め、打くつろいで清明茶を啜れるところに、運輸丸の取扱所より出帆延期の通知に接し、當然の事なりと誓り捨てながら、雨の止みたるに午後はかの渡名喜よりの海上、余の壯觀に恍惚たりし島尻南端絶壁上の檳榔樹林に分入らんと約し、やがて村内を隈なく一覽し來らんとて河野氏と共に警察署を出でぬ。折柄風もや、穏やかになれり。

二三十分開散歩せる後、曩に那覇よりの海上天候の激變を豫言したる商人の家に過ぎり、そが所藏の古土器など一覽し居るほどに、忽ちまた汽笛の聲起りぬ。今は運輸丸が再び出帆を企てたる事に疑ふべき點なし。直ちに取扱所につきて糺せば空模様の直りかけたるに、

是非とも出すべき見込みなりといふ。余はその無謀に驚ろきながらも、いつとも期し難き次の航海まで残されては一大事なり。この一事遂に余の意を決せしめたり。

余は宿舎に歸りて、また衣服を改め、濡れたるズボンを着、水の入らる靴を穿きて、濡れたる防水外套を纏ひ、濡れたる毛布包——但し蚊帳のみは手のつけやうなければ河野氏に托したり——を携へ警察署長と共に海岸に出で、以前の傳馬に乗込ぬ。こたびは雨なく風もやや薄れたるに、船は左したる困難もなく、三十分の後には本船の舷梯に着られたり。かくてわが運輸丸は十時半を以て儀間の泊を船出しぬ。

運輸丸の小なる二等船室（一等船室なし）には二十餘人の男女を充したり。いづれも海上の荒を案じて重なり合ひて打伏したれば足を容る、隙だもなし。余も辛く中央の邊に海老の如くなりて横臥しつ。余の頭は他人の足を壓し、余の足の上には他人の足重ねられたり。かゝる時かゝる場合、窮窟は忍ばざるべからず。無禮は恕せざるべからず。只各自の祈るところは平安なる航海をなして早く慶良間に入らん事のみ。然り、運輸丸を慶良間に寄せん事は、余と本船との約束なれば余は船の此夜必らず慶良間に泊すべき豫定なることを信じて疑はざりしなり。况んや慶良間には安全なる錨地あり。沖繩近海における汽船の常に避難するところはこの慶良間なるにおいてをや。かくて安全な

る錨地に向ふ事は、實にせめてもの思ひ遣ならずんばあらず。

久米島を發して一時間にして、天候はまた次第に險惡の兆を呈し、急雨時に甲板を衝いて到り、船體は甚しく動揺し來れり。二三の婦人が嘔吐の聲はまづ斷續して起り來りぬ。船内二三個の金盃を置れたるを船に弱きものは、既にそれ／＼占領し居れるなり。これを暫らくにして嘔吐の聲は男子客の二三よりも起れり。動揺はいよいよ甚たしからんとす。風甲板に鳴るの聲々として怒濤と相和す。かゝる時妙に余の視線を惹けるものは余の頭上に吊られたる浮器なり。この浮器よくわが生命を托するに足るべきか。

また一時間を過ぎぬ。船は俄然として更に恐るべき程度にまでその

動揺を強め來れり。久米島と慶良間の中間に惡潮あり。その幅五六海里に亘り、潮流錯綜して定まらず。天候の激變せる時は、種々の變潮を生じ、往々漁船を覆没せしむ。わが運輸丸は猛惡の天候を冒して、今しこの惡潮に入れるなり。千噸の船を以てせば必らずしも意とせし否四五百噸の船を以てするも猶よく堪ふるを得ん。たゞそれ尠たる百餘噸の小汽船を以てこれを横斷せんとするに至つては、抑もまた何等の冒險ぞ。

(三三) 浸水船床を濕す

此日余は毫も船暈を感ぜざるなり。

老朽せる小船體はその動搖につれて、ミシ〜と裂るが如き音を發し始めぬ。かくの如き音響は久米島を發して二時間以内には未だ聞くとろろなかりしなり。我等は無事に黒潮を横斷するを得べきか。ガタ〜!! ミシ〜!! 船側の棚に上られたる革靴行李の類は一時に我等の横臥せる上に落來れり。同時にドツと舷窓を突破して打入る波は、船室内の人をして一齊に色を失ふて立上らしめぬ。然り、余は餘りに凄まじき勢をもて海水の突入し來れるに、誠に激浪の舷窓を破りたるべきを思へり。

されど舷窓は打破られたるにあらず。船の老朽せるため、窓に嵌込みたる框に間隙を生じありて、こゝより波は唧筒の口を出る如き勢も

て打入るなり。

形勢は頗る不穩になり來れり。余は實に一ヶ月の航海を後るとも久米島に止まるべかりしを悔めり。余の傍なる那覇の人は嘗て同じ運輸丸によつて、三日間水船となりて洋上に漂流し僅かに沈没を免がれたるの経験を嘗めたる男なり。語つていふ、當時の運輸丸の冒険は實に今日に異ならず。今日の運命また實に測るべからざるものありと、天を仰いで浩嘆す。余の心細き事如何ぞや。

かゝる間に舷側に有せる左右六個の窓よりは、五分乃至十分の間隔を置きて、代る代る夥しく海水を打込み來り、船客の毛布衣類悉く濕はざるものなきに至れり。毛布衣類の濕はへる猶忍ぶべし。われ等

の臥せる船床の今やびいよくに濕ひ來れるを如何。運輸丸の水船に
ならん事は必らずしも長き時間を要せざるべし。若しそれ更に激烈の
波あつて船腹を打來らんか。遂に老船の舷側を突破し、一舉に運輸丸
の運命を決せんもまた知るべからざるなり。

見よ、船室の中は次第に水浸りにならんとす。嘔吐の聲また断續し
て起りつゝあり。行李落來れどもこれを舊位に復せんとするものな
く、打込み來る水はしたゝか顔にかゝり、衣服に澱ぐもまた之を避け
んとするものなし。顔濕ひ衣服濕ふが如き當面の大問題に比すれば云
ふに足らざるのみ。船室の光景眞に凄慘として名状すべからず。

これを暫らくにして入來れるボーイは曰く、天候不穩を極め、慶良

間の入口危険なれば本船は寧ろ險を冒して那覇に直行すべしと。これ
を聞ける船客はみな激せり。彼等は曰く、運輸丸は由來旅客を遇する
の道を知らず。その進退毎船舶員の都合にのみ依るを常とす。貴重な
る船客の生命を賭して冒險を試みんとするが如きは斷じてこれを阻ま
ざるべからず。然れども船員は毫も余等の言を用ゐず。乞ふ貴下總代
として船員に談じくれよと。余は勢の止むべからざるを見て、直ち
に責任ある船員を呼來らしめ、嚴談を試みて曰く、慶良間に寄港すべ
き事は、沖繩縣廳を仲介者として余と本船との間に成る約束なり。况
んや那覇に直行すといふが如きは無上の冒險なるをや。余は余の權利
によりて慶良間に寄港する事を要求すと。かくの如き言辭を用ゆるは

余の屑しとせざるところなりと雖も、生ぬるき談判にては到底要領を得じと信じたればなり。

船員は船長に相談し來らんとて退ぞきたり。既にしてまた出來りて曰く、慶良間に寄港せば今日那覇に歸着せん事難し。船を慶良間に寄するも貴下上陸せずして可なりやと。余聲を勵まして曰く、余は上陸すべし。本船が強ひて那覇に歸着せんとせば、余を慶良間に残し去るも可なりと。この一語運轉丸の進退を決せしめたり。船は遂に慶良間に入りて一泊する事となれるなり。

船客始めて愁眉を開けり。而も船の動搖は減じたるにわらず。危険の度は全く去りたるにわらず。この時々計を取出し見れば、惡潮に入

りてより既に四十分を經過せり。更に三十分を以てせば無事にこれを通過し終り得るならん。

分もなほ時の如くなりしその後の三十分間は漸やく過去れり。船は次第に針路を轉じて、慶良間島を指さしぬ。たいそれ然るにも拘はらず、船體の動搖の毫も輕減されざるは、風力の更に加はれるが爲なり。

人々の安さ心もなき中に更に四十分を經過して、わが運輪丸は漸やくに慶良間海峡に入れり。然れども海峡の中風濤なほ險惡にして、平日の錨地なる座間味に入る事能はず。轉じて僅かに阿護灣に入れば、今しも汽船仁壽丸が那覇を發して先島(宮古、八重山)に向ふの際、風波

を避けてこゝに逃込み來れるに會しぬ。五倍大の仁壽丸を以てしてなほ且遁れ來れるの航路に向つて、これを行らんとする運輸丸船員の無謀に至つては、余そのいふ所を知らざるなり。(附記す、仁壽丸はこの時を隔つる約八ヶ月の後暴風雨の厄に遭ふて慶良間近海に沈没せり)阿護に入るの時まさに五時、平日よりは三時間を餘分に費やして辛うじて安全の地を求め得たるなり。然れどもあゝ余は遂に無事なるを得たり。多謝す、運輸丸。余に如何なる値を出しても、買ふ能はざるの經驗を與へたる事を。

慶良間島

(一) 座間味村の一夜

沖繩本島南部の海岸若くは丘陵の上に立ちて海に面する時、常に目睫の間に落來りて無上の風趣を添ふるものは全島古生代の水成岩より成り、支那人がその形より馬齒山と呼べる慶良間諸島なりとす。慶良間は久米島と同じく風俗の淳樸を以て知らるゝの地なり。コバ即ち檳榔樹の多く自生し居るの島なり。而して五十有餘の島嶼より成る琉球列島中において鹿の棲息し居る唯一の島なり。由來琉球諸島には野猪の外獸類の野生し居るものなきに、獨り鹿のこの島にのみ繁殖せる

は一個の疑問なると共に、また無量の詩的價値をこの島に添付するもの無くんばあらず。

海上の危難を免がれ得て、此美なる島に逃れ來れる一事は、實に余をして慈母の懷に投ずるの感あらしむ。余は久米島の警察署長と共に本船の短艇より上陸すれば、戸數十七を有する上陸地點阿佐村に、座間味間切長は駐在巡查と共に來りて余の一行を出迎へた。余等はこゝより十餘町の峠越に座間味村に赴む。間切長の自宅に導びかれぬ。余は休息の後村内の巡回を試みたるが、こゝも珊瑚岩の垣を設けず。多く皆雜樹の生垣を繞らし、家屋も瓦葺多く、その清潔の度もまさに久米島と伯仲の間にある。戸數は九十九戸に過ぎざるも家々豚と

山羊を飼養せざるものなく、殊に山羊は全村の人別以上の數に上れる由にて、赤兒の泣聲に似たる叫聲は右に左に黄昏るゝ家々の山羊小舎より起り、その喧しさいふばかりなし。

海岸繪の如き座間味灣をなし、木理を成る粘板岩層重して海を壓するの處、こゝに天孫氏宮と稱する古墳あり。陰曆正月十六日には一村擧つてこれを祭り、島中第一の盛儀となすといふ。その由來については毫も口碑及び文書の徴すべきなし。抑も天孫氏は琉球の始祖と稱せらるゝものにして歴代二十五世を傳へ、以て舜天王に至れりとなせるも、天孫氏歴代の墳墓なるものは今日一の存せるあるなし。偶々蕞爾たる一離島の中に天孫氏宮と稱せる一古墳を留むるもの、奇といふべ

し。果して何人の墳なるべきか、吾人はその由緒の湮滅に歸したるを惜しむ。

余は天孫氏宮を辭し、建築中なる水産製造所を見て間切長方に引返しぬ。間切長は松田某と云ひ、昨年藍綬章を下賜され、間切役場の所在地たる座間味村は、實に沖繩縣下の模範村として知られつゝあるなり。慶良間の一士民たる間切長が如何にして藍綬章を下賜されたるかを説く事は、慶良間島を知らんとするものゝために必らずしも無趣味の記事にあらざるべし。

彼は座間味小學校内に夜學校を興し、補習科を置きて村内の男女を教育するの道を講せり。この夜學校には四十五十の大人も來り、乳香

兒を抱ける母親も來る。すべて一村の無學者を會せるが故に、今日にては文盲なる慶良間の島人も殆んど假名文字を書き且これを讀み得ぬものなきに至れり。

彼は毎月二回小學校内に内地語の練習會を催ほし、村内のものをすべてこゝに來會せしむるの道を開けり。この練習會には小學生徒をして日本古來のお伽噺、或は簡單なる歴史談等を試みしめ、また興味ある對話をなさしめて、小學校の教員に一々訂正指導せしむ。而して村人は實に傍聽の義務を有し、また喜んで來り會せるが故に、今日にては内地人に接する事少なき島人も、漸やく内地語を記憶し得るに至れり。

彼はまた殖産興業に極めて熱心なり。由來慶良間の近海最も鯉魚に富めど、島人はこれを漁獲するの法を知らず。常に他縣人に遺利を斷せらるゝを遺憾とし、先年他縣人の慶良間に來り漁するものは必ず慶良間島民を乗込ましむべきの規約を設け、かくて他縣人の鯉魚船に島民の乗込み得べき機會を作り、漁獲の方法を練習せしめたり。去る三十五年偶々銚子の鯉魚船の沖繩に漂着するものあるや、彼直ちにこれを買ひ取り、始めて鯉魚漁を近海に試みしめたるに非常の大漁あり。島民全體に鯉魚の有利なる事を意識せしめ、爾來三四年の間に共有財産もて鯉魚船を買取り（一隻の價格六百圓前後）今日にてはその九雙を有するに至れり。かくて慶良間の鯉魚は駭々として進歩の端を

開き、島民の福利を増進せしめつゝあり。

その他慶良間には從來砂糖なかりしを數年來甘蔗を栽培せしめしめ、今日にては全く那覇よりの輸入を杜絶するに至れるが如き、また盛んに山林の仕立を奨励し、今日漸やくその結果を現はし來れるが如き、錫、鯉節、鐘詰等の製作を試むべく水産製造所を興せるが如き、間切長としての彼の功績は眞に没すべからざるものあり。その藍綬章を下賜されたりといふものまた偶然にあらざるを知るべし。

(二二) 慶良間を去る

此夕水産製造所講師小學校長駐在巡查等間切長方に會し、余のため

歓迎の小宴會は開かれたり。酒は例によりて泡盛、肴は慶良間名産大鳥賊(大なるものは三貫目に餘る)の酢のもの、鹽豚料理等に過ぎざるも主人の好意に無量の味は籠れり、况んや數時間生死の境に彷徨せる後、今この仙境に似たる小離島、沖繩縣下の模範村に避難し來りてかばかり心盡しの歓迎を受けるをや。

宴は九時に撤せられ、余等は疲れたる身の直ちに臥床に入りぬ。此夜風尙吹荒れ、村の雜木を撼かす音物凄く、容易に眠成らず、明日の天候のみ氣遣はれ、かくても冒險なる運輸丸のなほ出帆を試みる如き事あらば、余は斷じて慶良間に止まり、靜穩の日鯉魚船を出さしめて那覇に歸着せんなど、所謂取越苦勞に肝膽を碎ける中、いつか深き眠

りに入りたり。

翌る拂曉汽笛の音に夢を破られて身を起せば幸ひに風は大方吹止み居たり。かくては運輸丸の航海もまづ無事なるを得んと、余等は始めて安心の吐息を漏らし合ひぬ。かくてそこへに食事を認め、旅装を整へてまた時越しに阿佐村に出で、刳舟を雇うて再び運輸丸甲板上の人となれり。

昨日は中山五港の隨一に數へらるゝ阿護灣の中も、なほ波荒れ、風寒く、人をしてその風光を顧みるの餘裕なからしめしが、今日は波靜かなる事鏡の如く、僅かにその口を殘して、袋の如く丘陵をもて圍繞されたる蒼灣の、坐るにその好碇繫地なるべきを思はしめぬ。惜しいか

な、その規模甚だ大ならず。一千噸の船四五隻を泊せしめ得るに過ぎ
 れど、灣外猶慶良間海峡の中において、暴風の時と雖も風浪甚高か
 らず。殊に相接せる阿嘉海峡はその安全の點阿護に次ぎ、優に一艦隊
 を泊せしむべしといへば、兩々相待つて沖繩最良の錨地たるを失はず
 といふべし。

若夫阿護灣内の風光に至つてはその明麗多く比儔を見ず。三面を包
 圍せる丘陵はこれを山といはんには稍低きに失せるも、なほその高さ
 百尺より二三百尺を下らず。その東方を圍繞せるもの最も高く層重連
 亘し、山腹には松多く鬱生し、山頂より山背に亘りて、コバの木その
 笠の如き葉を擴げ、青綠色の一帶を劃し居るを見る。この邊殊に鹿

多くして、野猪もまた時に出没するといふ。余は檳榔樹の下に彷徨ふ
 一群の鹿を想像して、切にかの山に分入らん事を欲しぬ。

灣の奥、袋の底に當れる處、珊瑚礁の碎けて粉末となれる白砂、純
 白眞に雪を欺ひき、蕨々として阿佐村を包容せる福木その光澤ある葉
 を日光に映發して、雪の如き白砂の上に鮮緑の帯を描く。遙かに灣口
 に當りて削立せる數個の巨巖あり。或は野獸の如く、或は巨人の立て
 るが如し。此間に泊せる運輸丸は直ちにこれキャンパス内のものにして
 われもまた畫中に立てるの人なり。昨日暗澹たる風雨を冒して辛うじ
 てこゝに入れる運輸丸と、今日煦々たる日光を浴び、晝裡の青灣に浮
 べる運輸丸と、あゝまた何等の相違ぞ。

七時三十分運輸丸は碇を揚げ、船首を轉じて徐々に進行を始めぬ。やがて昨日避難し來れるかの仁壽丸の傍を過ぎれば、同船内には八重山出張の途にある和田沖繩縣第四部長あり。双方相認めてハンケチを打振合るも暫しの間、十分ならずして仁壽丸と遠く隔てたり。海上なほ前日の餘波ありたれども、危険の念は全く去りたれば、船客の面上には春光充渡りて、一人の船暈を感ずるものなきが如し。かくて海上廿二哩を無事那覇に歸着したるはまさに午前十一時半、直ちに池畑旅館樓上の人となりたる余は、實にいふべからざる安慰の念を感じたるなり。

(以上那覇にて認む)

琉球と爲朝

朝為と球玩

著芳幽池菊

不許複製

明治四十一年四月廿八日印刷

明治四十一年五月一日日發行

定價七十五錢

發行者

東京市日本橋區博正町二番地

堀野興七

印刷者

東京市日本橋區西田屋町廿六七番地

石川金太郎

印刷所

東京市日本橋區錦町廿六七番地

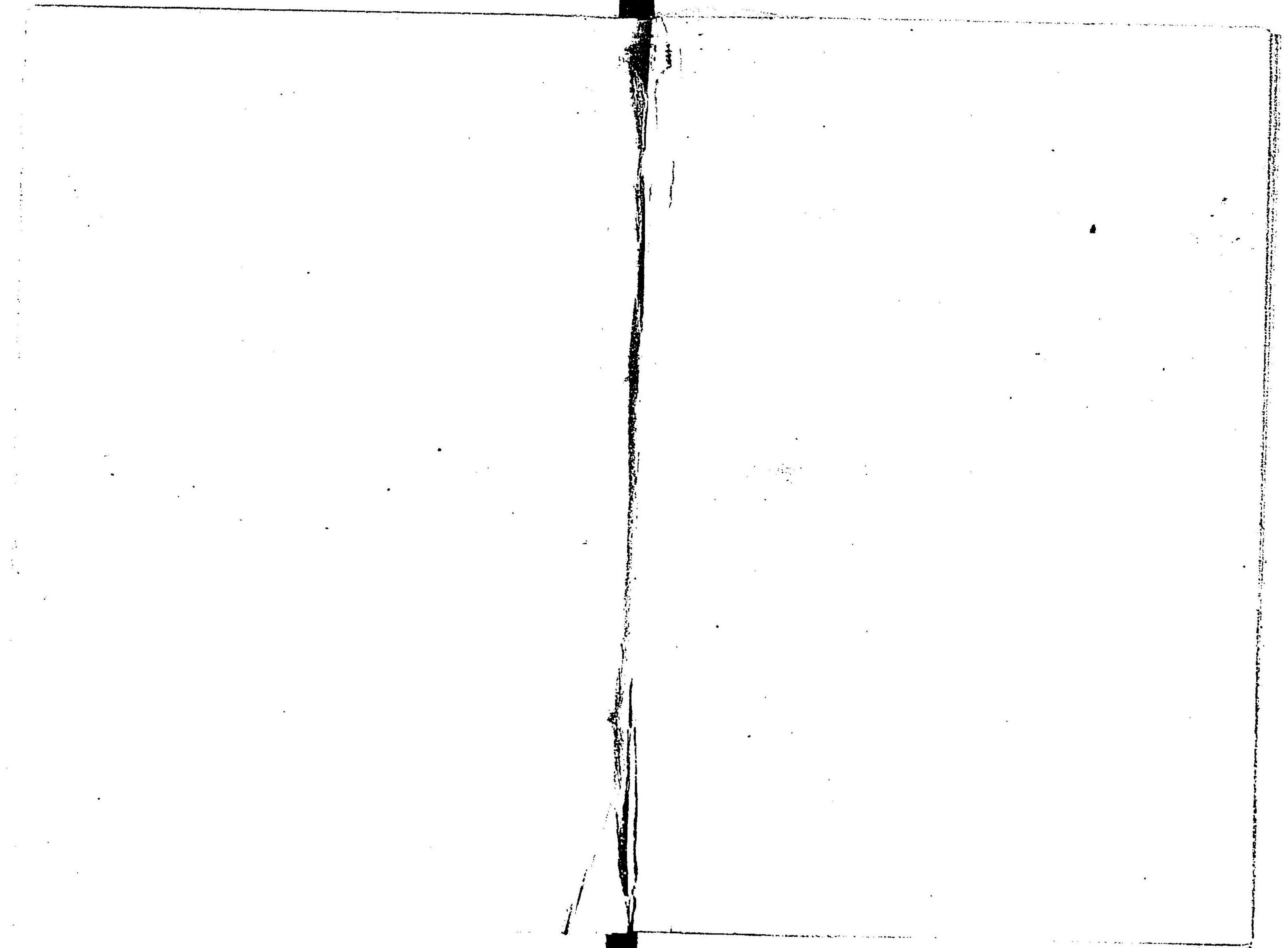
株式會社 秀英舍

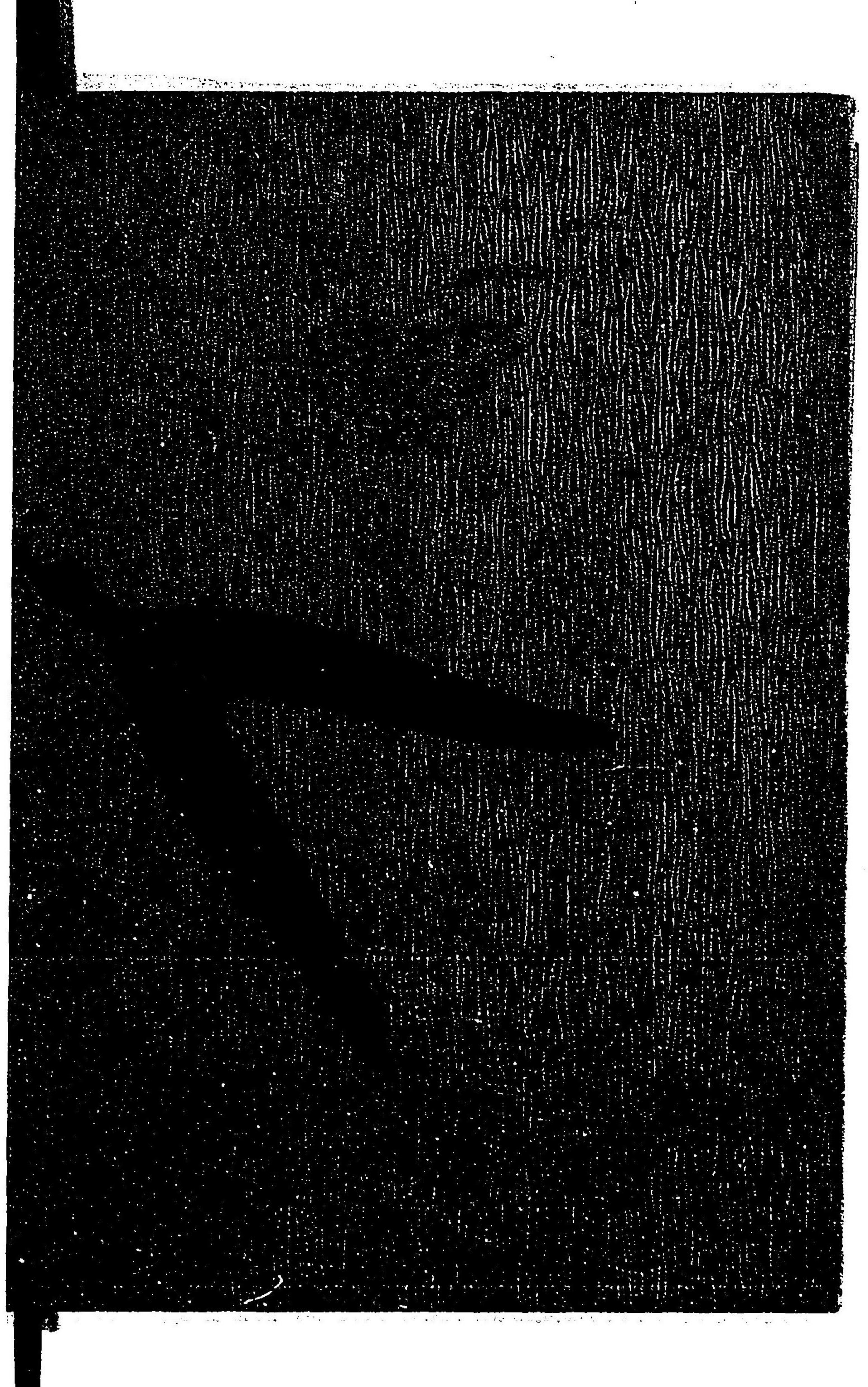
東京市日本橋區博正町一番地

文祿堂書店發行

振替貯金口座六六八二番







M

096319-000-4

915.6-Ki167r

琉球と為朝

菊池 幽芳/著

M41

DBR-0602



